

令和5年度 学修行動調査レポート

令和6年7月

拓殖大学 FD委員会

はじめに

本学は、大学の大衆化と学生の多様化が一層進む中、大学教育の質を社会に保証していくことが求められており、これに対応するために各種の施策に取り組んでいる。

大学基準協会「大学評価研究」（第13号2014年8月）において、「現状の教育課程の内容が、学生の主体的な学修を十分に促す内容となっているか、学生が卒業までに教育目標に沿った学修成果を十分に達成できているかを検証し、今後の具体的な改善方策につなげていくPDCAサイクルを確立する必要がある。そのためには、学修時間・学修行動の実態把握が必要となる」との学修行動調査の必要性が述べられている。この趣旨を踏まえ、本学では、学生の質保証や学修成果の可視化への取組に向け、学生本人が、自らの課程を通じた学修成果を把握するために、教育の学修経験を問う「学修行動調査」を院生を含む全ての学生を対象に平成30(2018)年度から実施している。

令和2(2020)年度からは、学修行動調査結果に対する所見で、卒業・修了認定・学位授与の方針に掲げる目標値を学生が達成しているかを把握し評価を行うとともに、その結果を踏まえ、「教育課程や教育内容・方法などの改善方策」を示している。

なお、令和3(2021)年度「学修行動調査」は、「授業改善のための学生アンケート」をはじめ、文部科学省による「全国学生調査」や学生部による「学生実態調査」が実施されていることに伴い、調査内容の重複を回避し、かつ学生及び教員の負担軽減とするため、実施を取り止めた。

目次

● 調査目的／調査概要	・ ・ ・ ・ ・ 3
● 回答者プロフィール	・ ・ ・ ・ ・ 4
● 授業中での経験	・ ・ ・ ・ ・ 13
● 授業時間外の学修態度	・ ・ ・ ・ ・ 20
● 本年度の週当たりの学修等時間	・ ・ ・ ・ ・ 25
● 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）	・ ・ ・ ・ ・ 32
● 学部設問項目	・ ・ ・ ・ ・ 44
● 学修行動調査に対する所見	・ ・ ・ ・ ・ 51

調査目的／調査概要

＜調査目的＞

本調査は、学生の主体的な学修を促す教育課程となっているか、卒業・修了時まで
教育目標に沿った成果が上がっているかなどを検証し、その結果を教育課程や授業の
改善に資することを目的に実施した。

＜調査概要＞

- ・ 調査方法：インターネット調査（Web調査：拓殖大ポータルからリンク）
- ・ 調査対象：拓殖大学・学生、大学院生(約1万人)
- ・ 調査期間：2024年1月9日（火）～2024年2月17日（土）
- ・ 回答者数：2122名

	商学部	政経学部	外国語学部	工学部	国際学部	学年計
1年生	159	223	89	117	66	654
2年生	167	123	51	86	50	477
3年生	107	110	62	105	48	432
4年生	115	144	52	126	51	488
学部計	548	600	254	434	215	2051

	学年計
博士課程前期 1 年	28
博士課程前期 2 年	27
博士課程後期 1 年	1
博士課程後期 2 年	5
博士課程後期 3 年	7
修士課程 1 年	1
修士課程 2 年	2
大学院生計	71

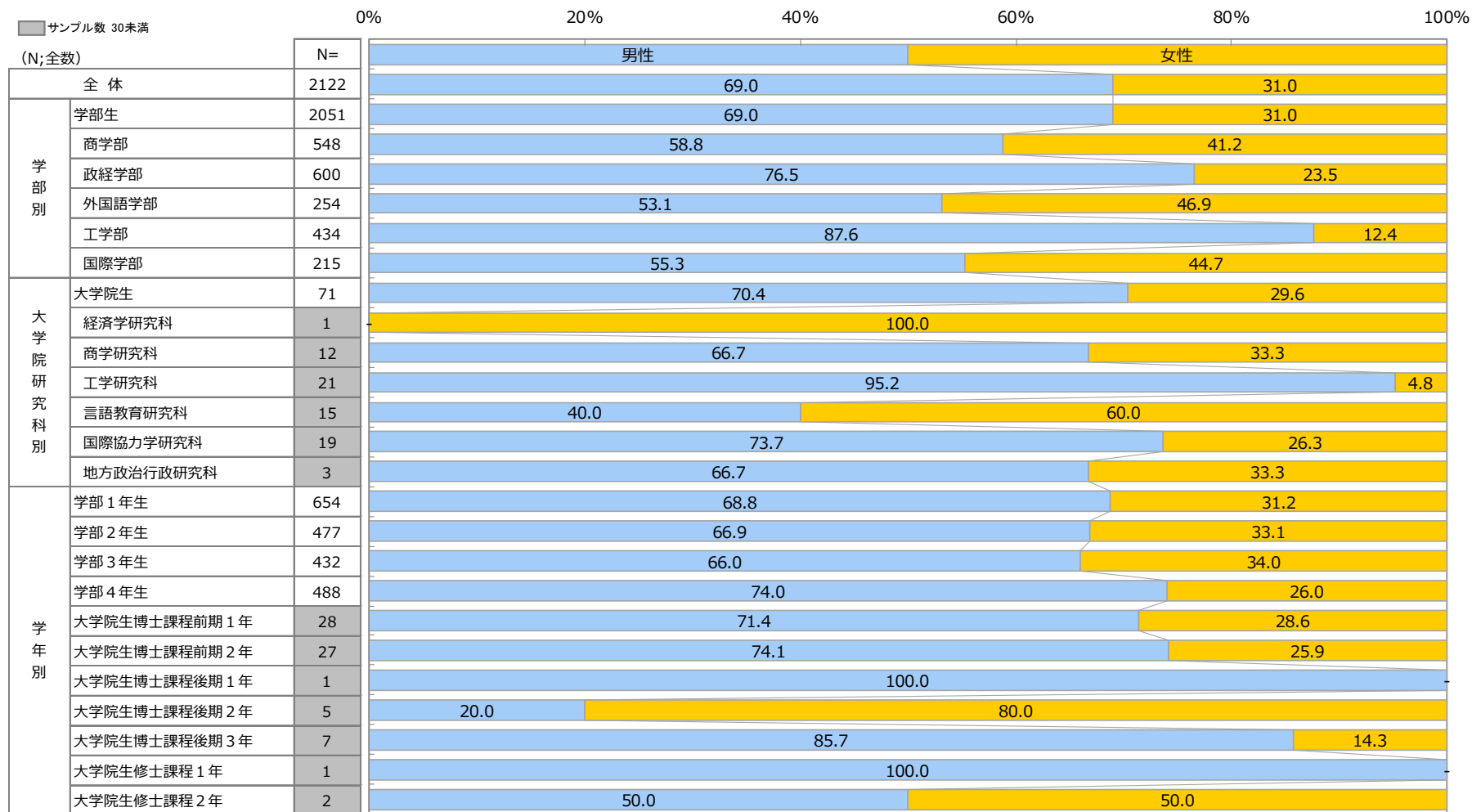
- ・ 調査主体：拓殖大学
- ・ 調査実施：ビデオリサーチ

回答者プロフィール

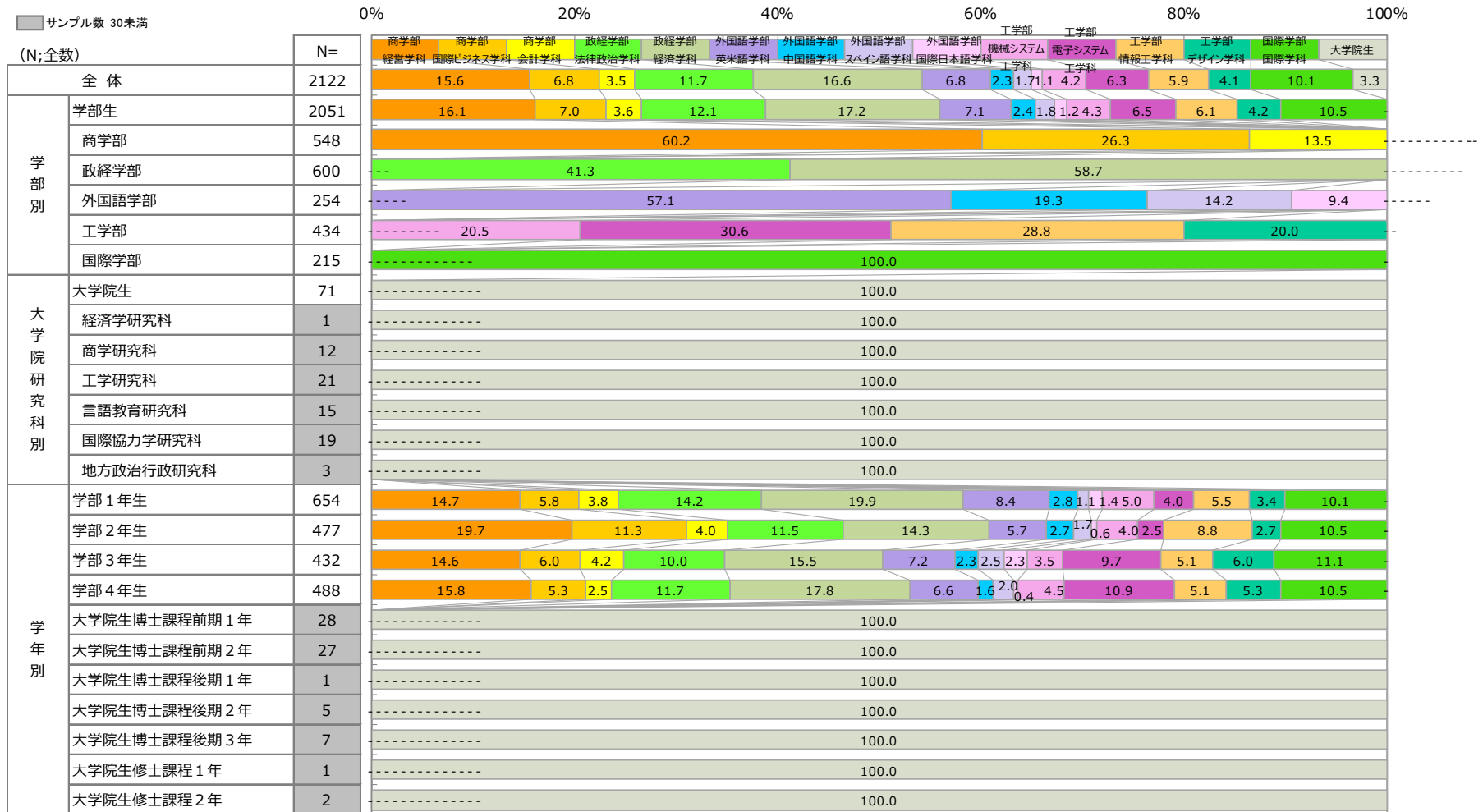
性別

Q1.あなたの性別をお知らせください。(SA)

- ・性別は、全体で「男性」69.0%、「女性」31.0%である。
- ・学部生、大学院生いずれも「男性」が「女性」を上回る。



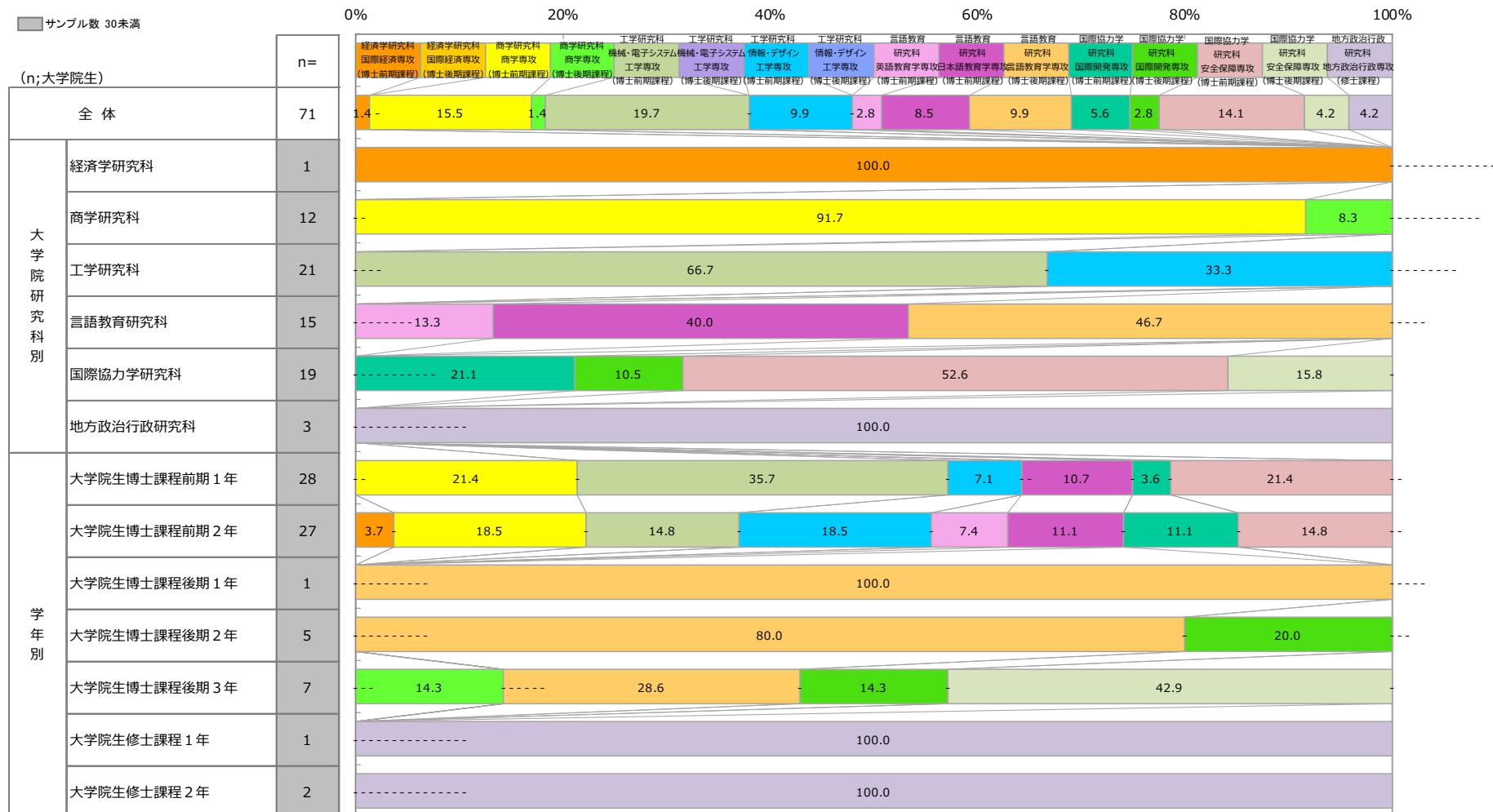
- ・所属は、全体で「政経学部 経済学科」が16.6%、「商学部 経営学科」が15.6%、「政経学部 法律政治学科」が11.7%、「国際学部 国際学科」が10.1%で10%を上回る。
なお「大学院生」は3.3%である。



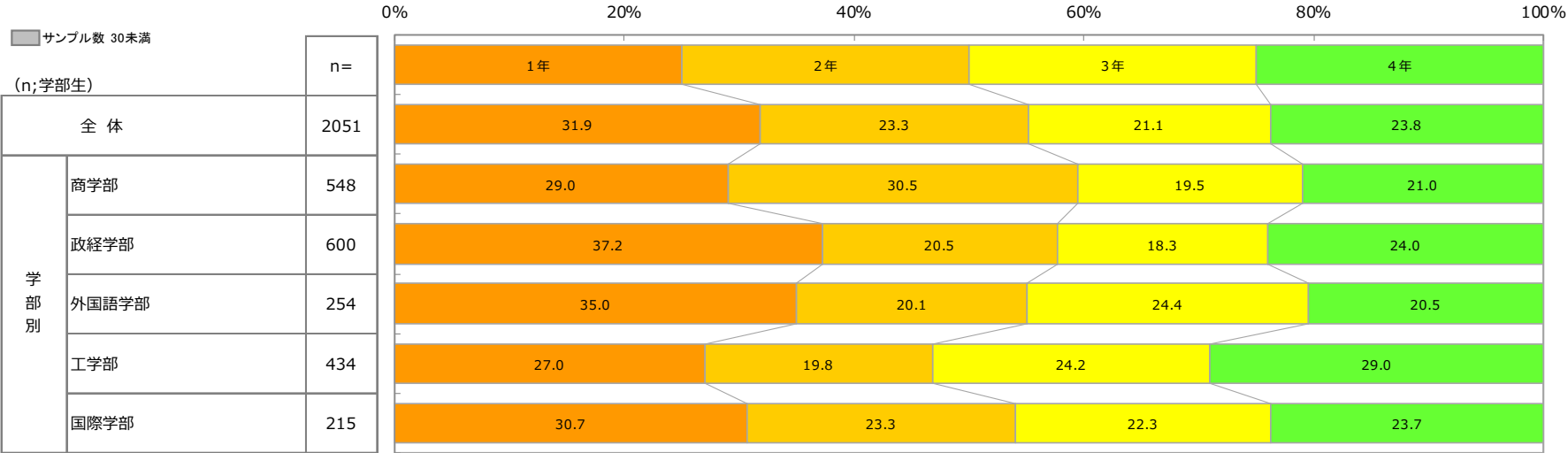
所属（大学院生）

Q2SQ.あなたの所属をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の所属は、「工学研究科 機械・電子システム工学専攻（博士前期課程）」が19.7%、「商学研究科 商学専攻（博士前期課程）」が15.5%、「国際協力学研究科 安全保障専攻（博士前期課程）」が14.1%で10%を上回る。



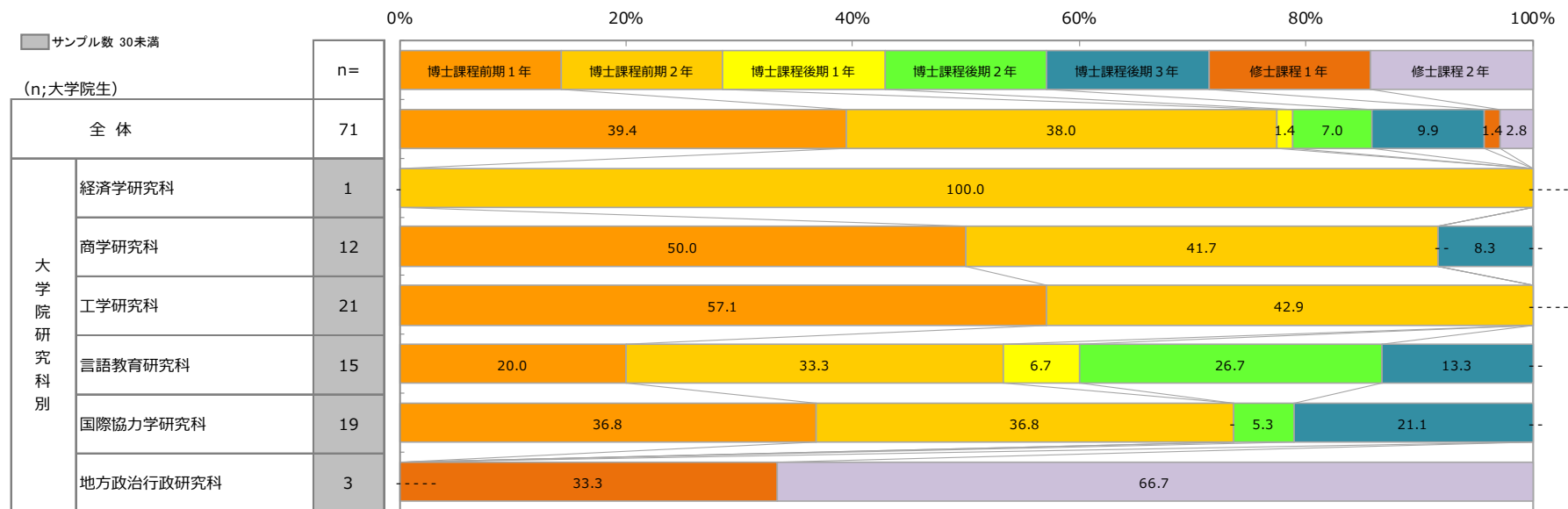
・学部生の学年は、「1年」が31.9%、「2年」が23.3%、「3年」が21.1%、「4年」が23.8%である。



学年（大学院生）

Q2SQ3.あなたの学年をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の学年は、「博士課程前期 1 年」が39.4%、「博士課程前期 2 年」が38.0%である。「博士課程前期」が合計約8割を占める。



外国人留学生比率

Q3.あなたは外国人留学生ですか。(SA)

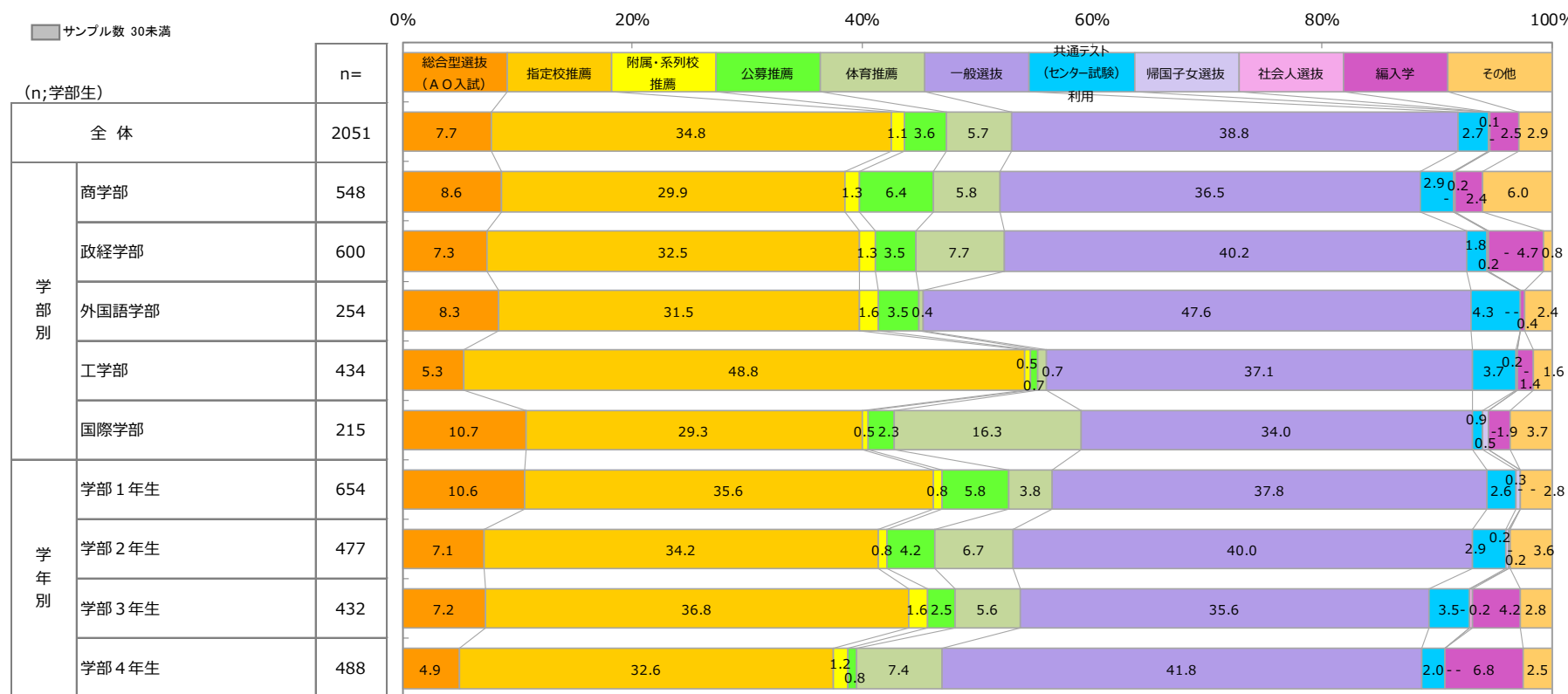
- ・外国人留学生比率は、全体の6.6%で、商学部が10.6%で10%を上回る。
大学院生では29.6%と約3割が外国人留学生である。



入試種類（学部生）

Q4. 拓殖大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。
(SA)

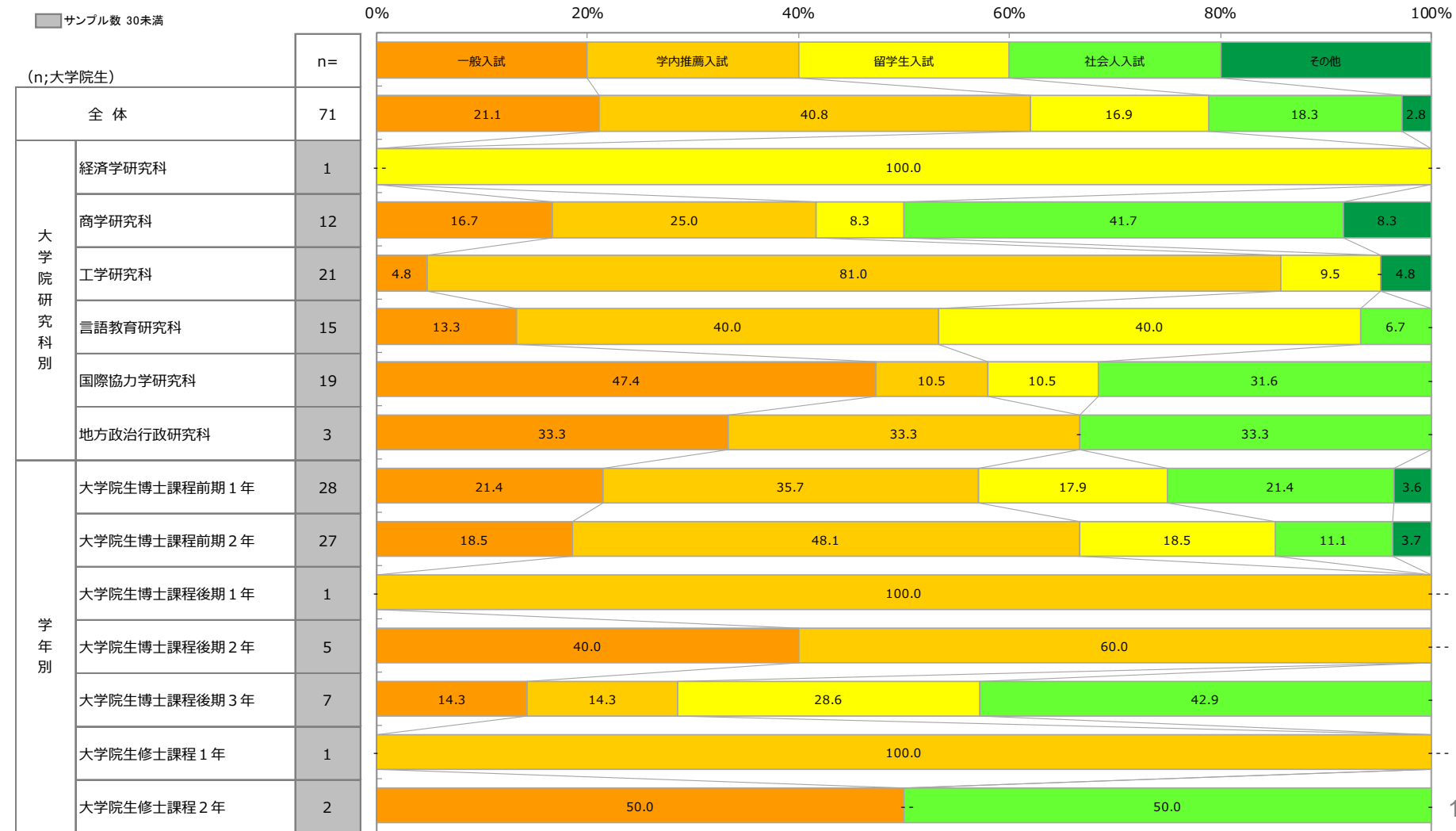
- 学部生の入試種類は、全体では「一般選抜」が38.8%で最も多く、「指定校推薦」が34.8%で続く。
- 学部別では、工学部で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る（+11.7pt）。他の学部では「一般選抜」が最も多い。
- 学年別では、学部3年生で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る（+1.2pt）。他の学年では「一般選抜」が最も多い。



入試種類（大学院生）

Q5.拓殖大学大学院へはどのような選抜方法で入学しましたか。（SA）

- ・大学院生の入試種類は、「学内推薦入試」が40.8%で最も多く、次いで「一般入試」21.1%、「社会人入試」18.3%と続く。

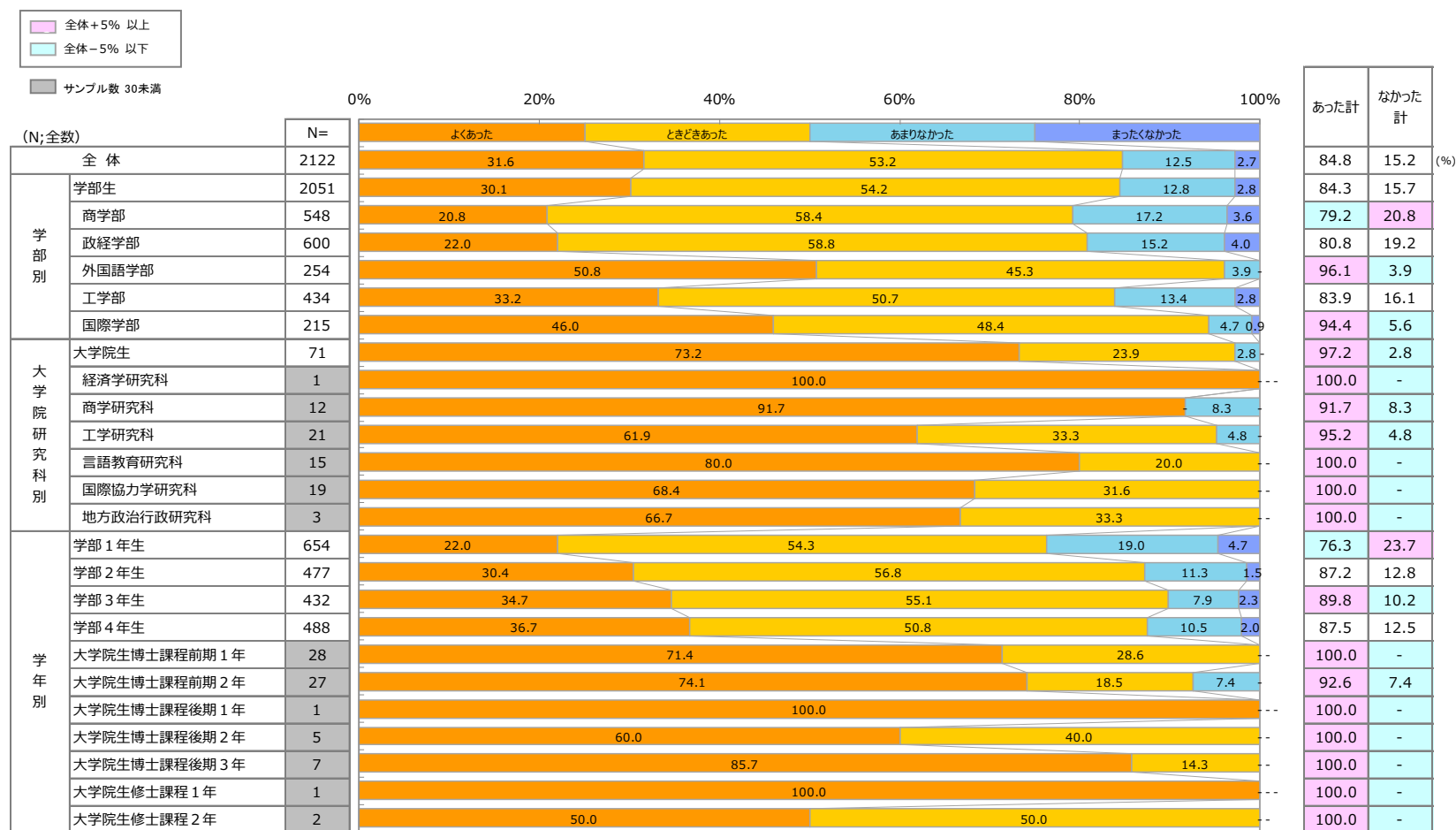


授業中での経験

自分の考えや課題を発表する授業有無

Q6.自分の考えや課題を発表する授業はありましたか。
(SA)

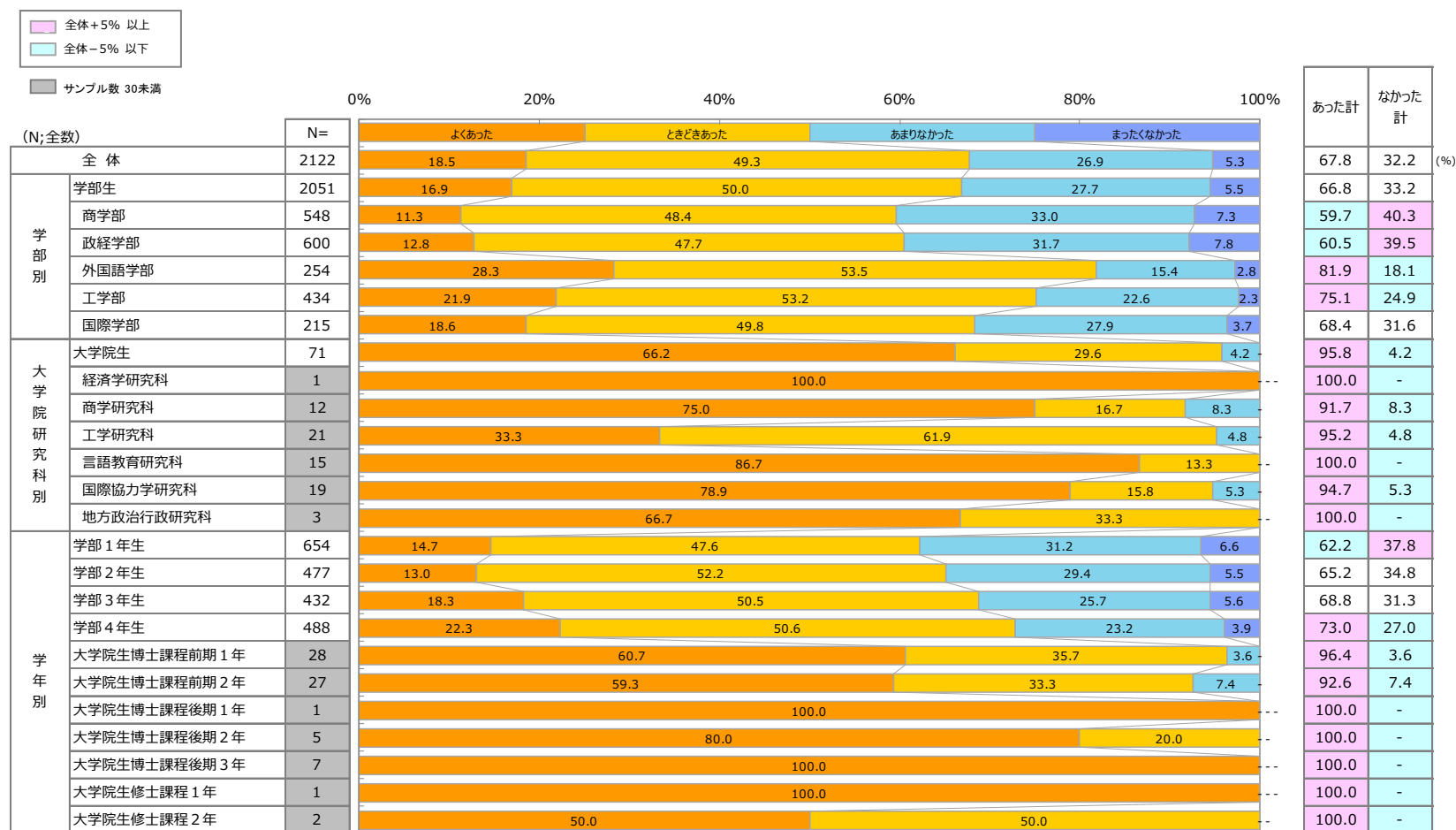
- ・自分の考えや課題を発表する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の84.8%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の15.2%を大きく上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を大きく上回る。
「あった計」をみると、外国語学部が96.1%で最も高く、国際学部が94.4%で続く。
また、大学院生は「あった計」が97.2%（全体より+12.4pt）に達する。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が89.8%で最も高く、続いて4年生の87.5%となった。



教員への質問・意見を述べたことの経験有無

Q7.教員に質問したり、意見を述べたことはありましたか。(SA)

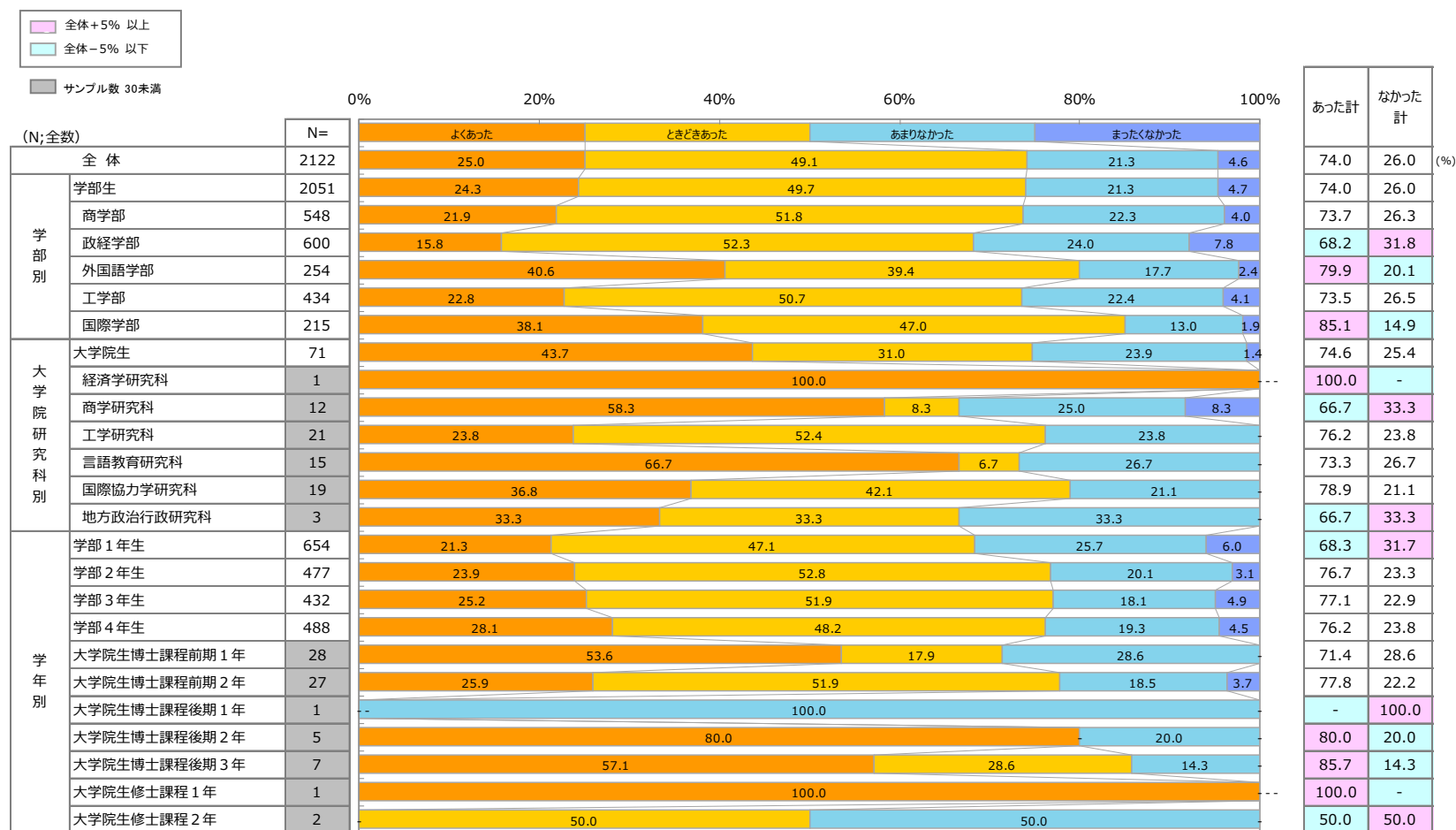
- ・教員への質問・意見を述べたことの経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の67.8%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の32.2%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ商学部、政経学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、外国語学部が81.9%（全体より+14.1pt）で最も高く、工学部が75.1%（全体より+7.3pt）で続く。また、大学院生は「あった計」が95.8%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



学生同士が議論する授業有無

Q8.学生同士が議論する授業はありましたか。(SA)

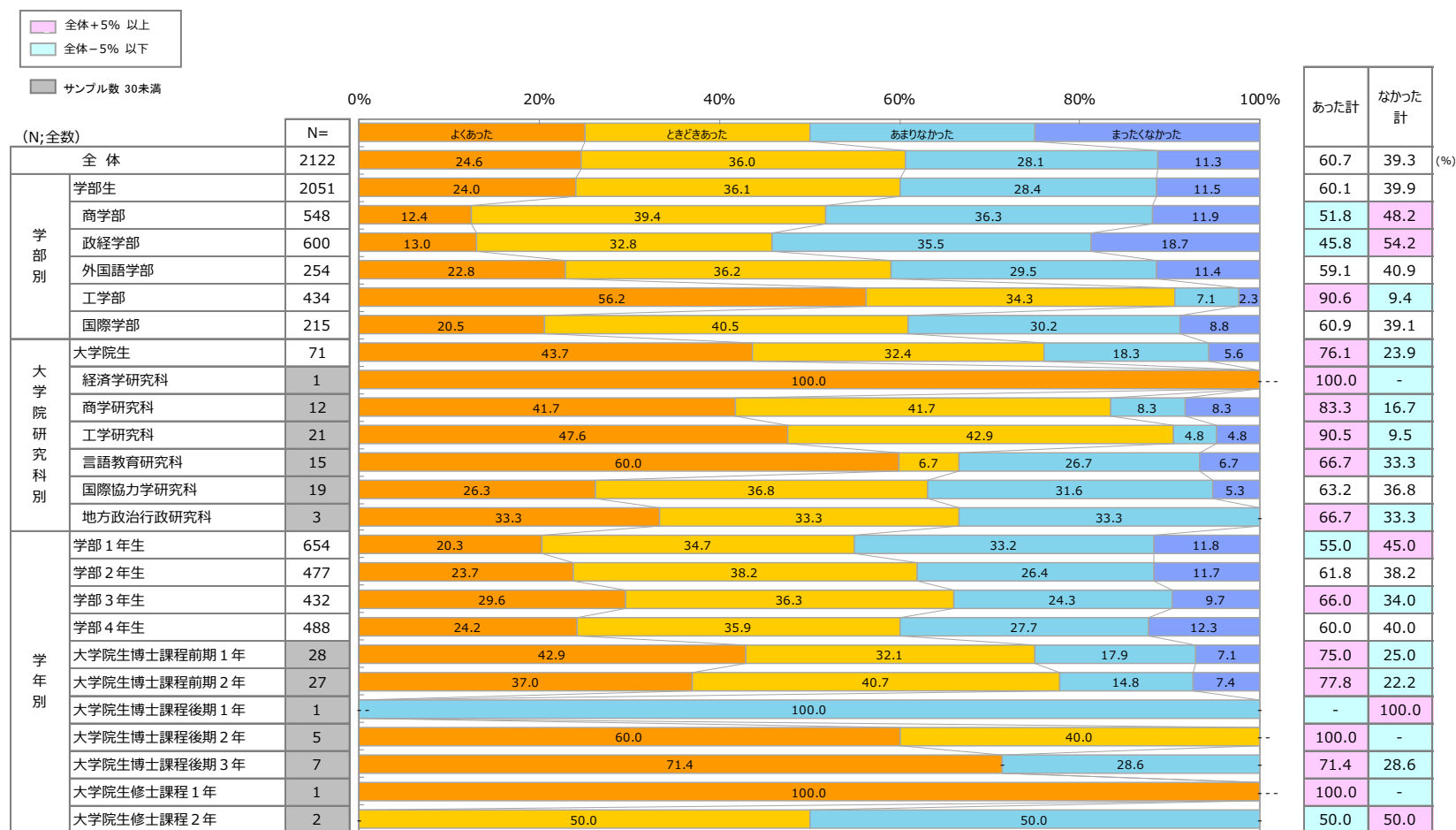
- ・ 学生同士が議論する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の74.0%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の26.0%を上回る。
- ・ 学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ政経学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、国際学部が85.1%（全体より+11.1pt）で最も高く、外国語学部が79.9%（全体より+5.9pt）で続く。また大学院生は「あった計」が74.6%。
- ・ 学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が77.1%で最も高く、続いて2年生の76.7%となった。



演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無

Q9. 演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業はありましたか。(SA)

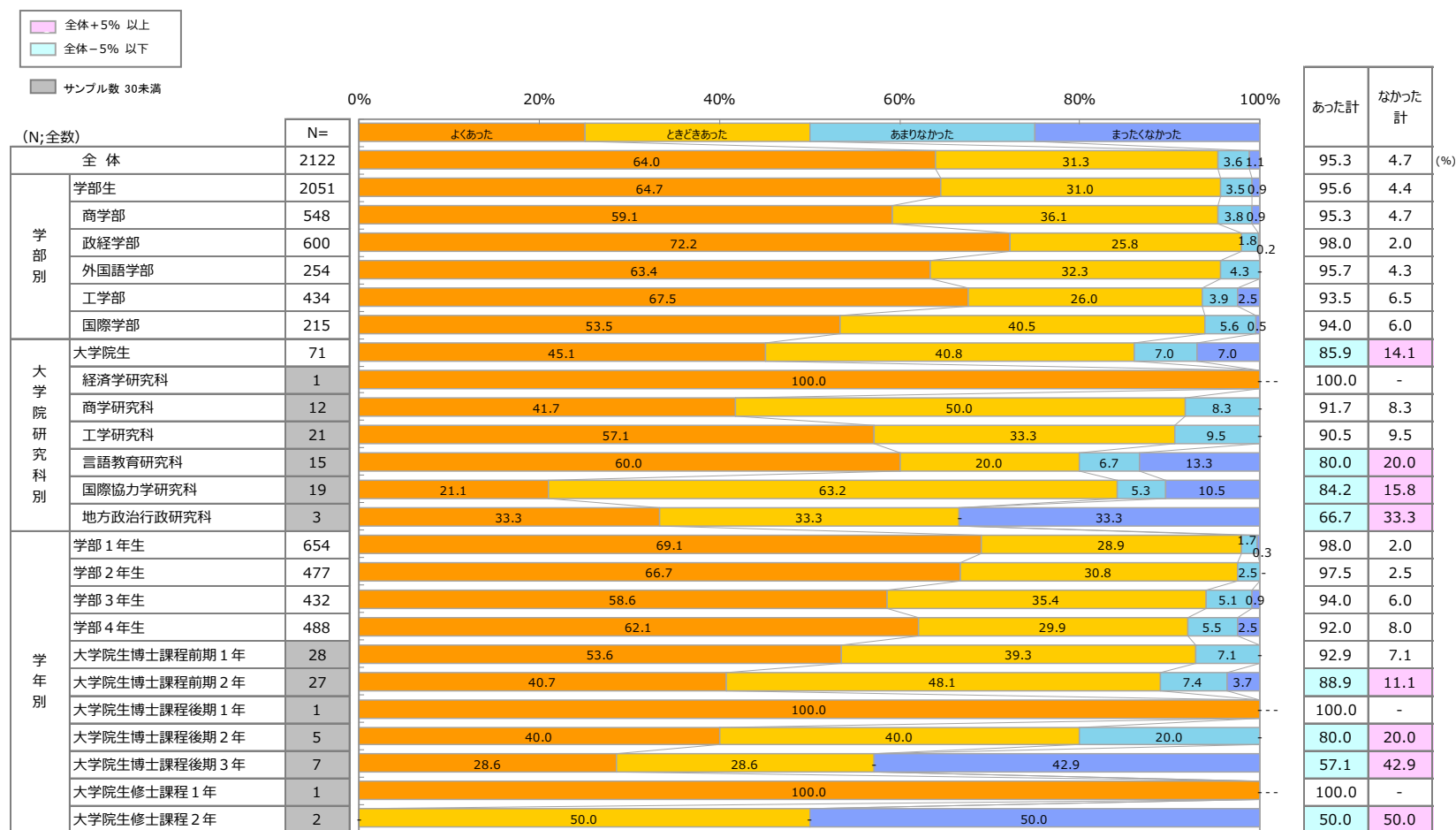
- ・ 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の60.7%で、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の39.3%を上回る。
- ・ 学部別では、政経学部以外の各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
政経学部では「あった計」が45.8%なのに対し、「なかった計」が54.2%であった。
「あった計」をみると、工学部が90.6%（全体より+29.9pt）で最も高く、国際学部が60.9%（全体より+0.2pt）で続く。また大学院生は「あった計」が76.1%。
- ・ 学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が66.0%で最も高く、続いて2年生の61.8%となった。



定期的な小テスト・レポートのある授業有無

Q10.定期的に小テストやレポートが課せられた授業はありましたか。(SA)

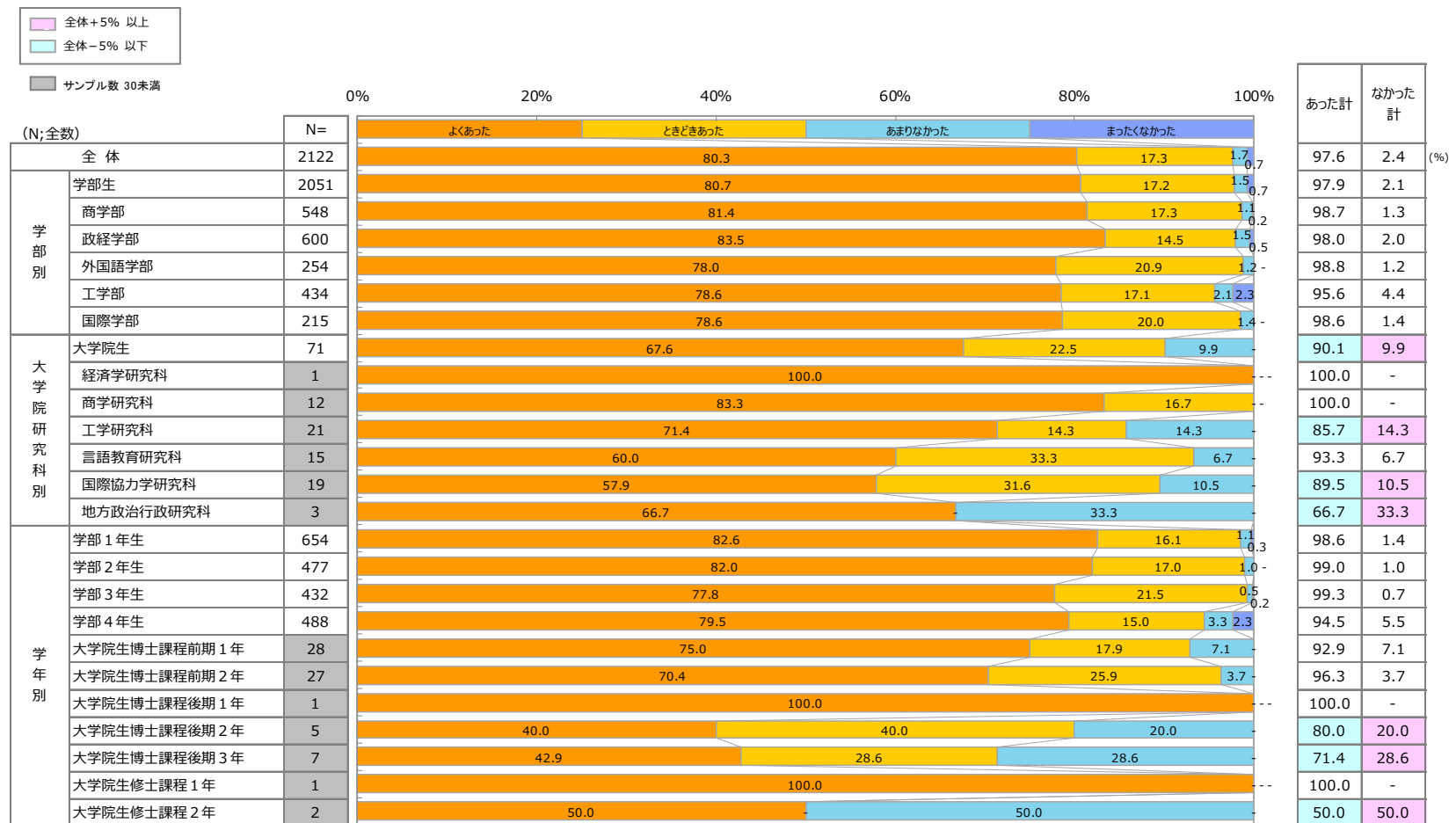
- 定期的な小テスト・レポートのある授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の95.3%に達した。
- 各学部をみても「あった計」は95%前後と大きな差はみられない。
また、大学院生の「あった計」は85.9%。
- 学年別で学部生をみると、学年が下がるにつれて「あった計」は上がる。



Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の 受け取りや提出を行った授業有無

Q11.Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業はありましたか。(SA)

- ・ Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の97.6%に達した。
- ・ 各学部をみても「あった計」は90%台後半と大きな差はみられない。
また、大学院生の「あった計」は90.1%。
- ・ 学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が99.3%で最も高く、続いて2年生の99.0%となった。

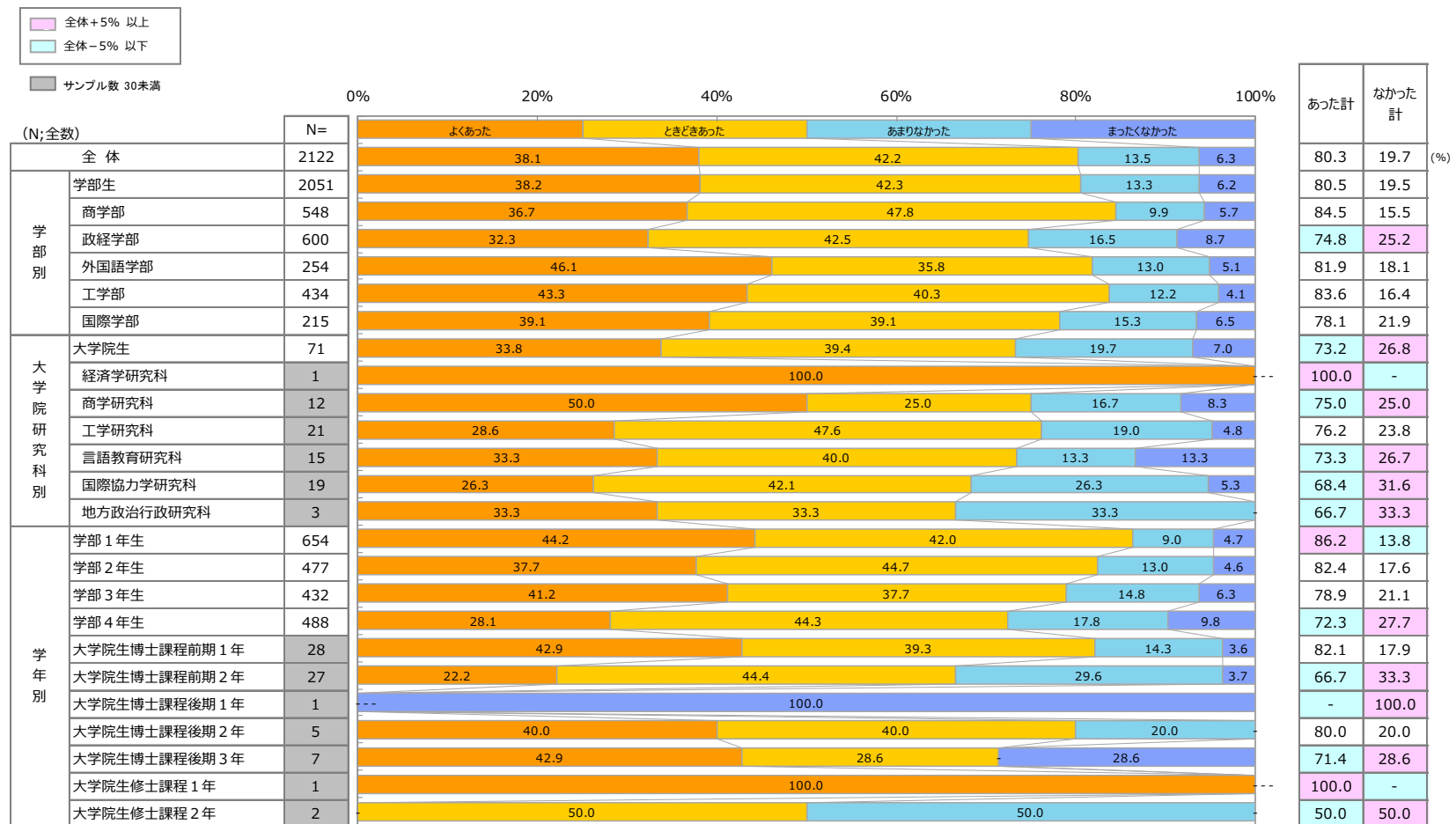


授業時間外の学修態度

他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無

Q12.他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したことがありますか。(SA)

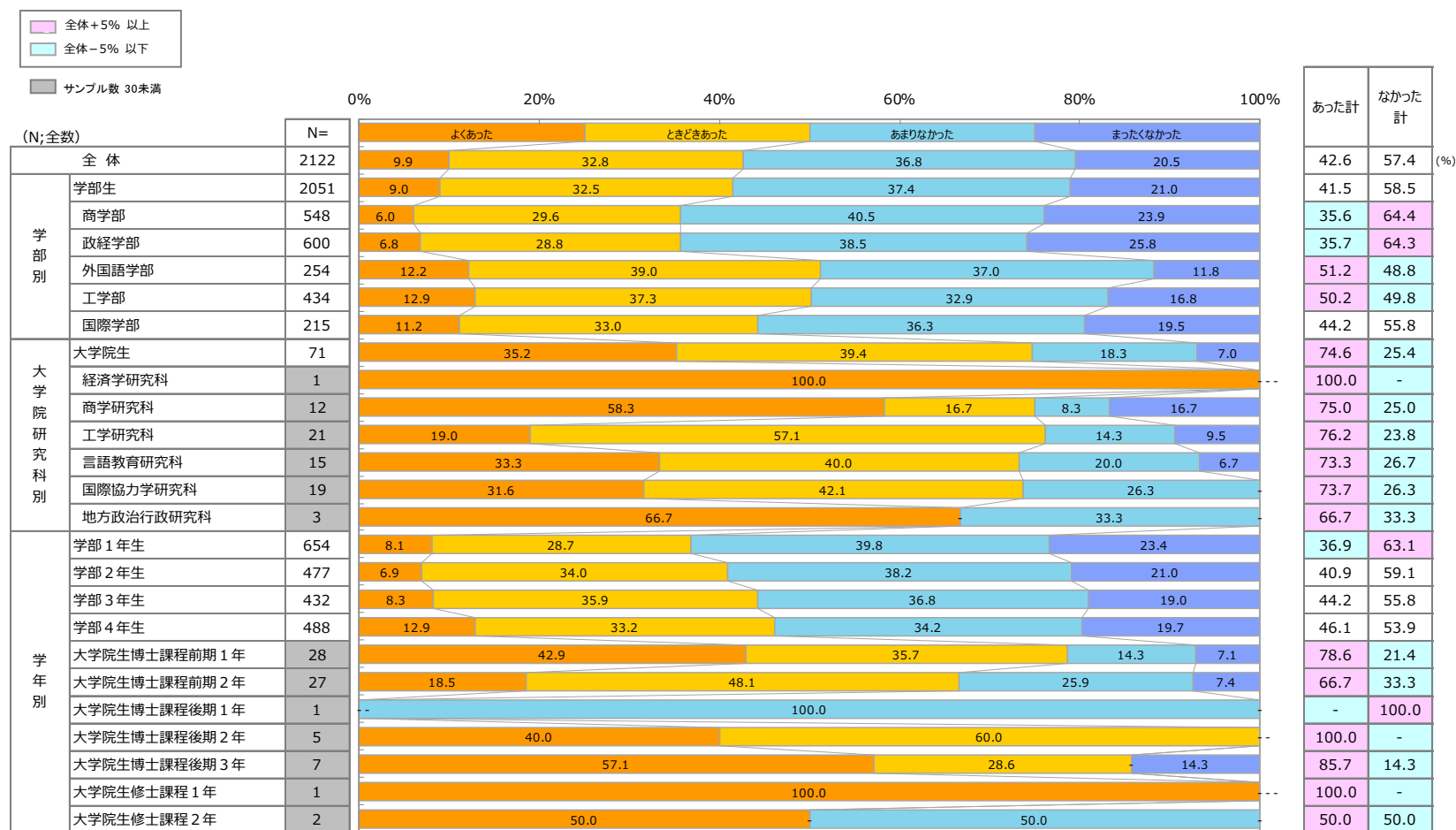
- ・他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の80.3%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の19.7%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
「あった計」をみると、商学部が84.5%（全体より+4.2pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が73.2%。
- ・学年別で学部生をみると、学年が下がるにつれて「あった計」は上がる。



教職員への学修に関する相談経験有無

Q13.教職員に学修に関する相談をしたことがありましたか。(SA)

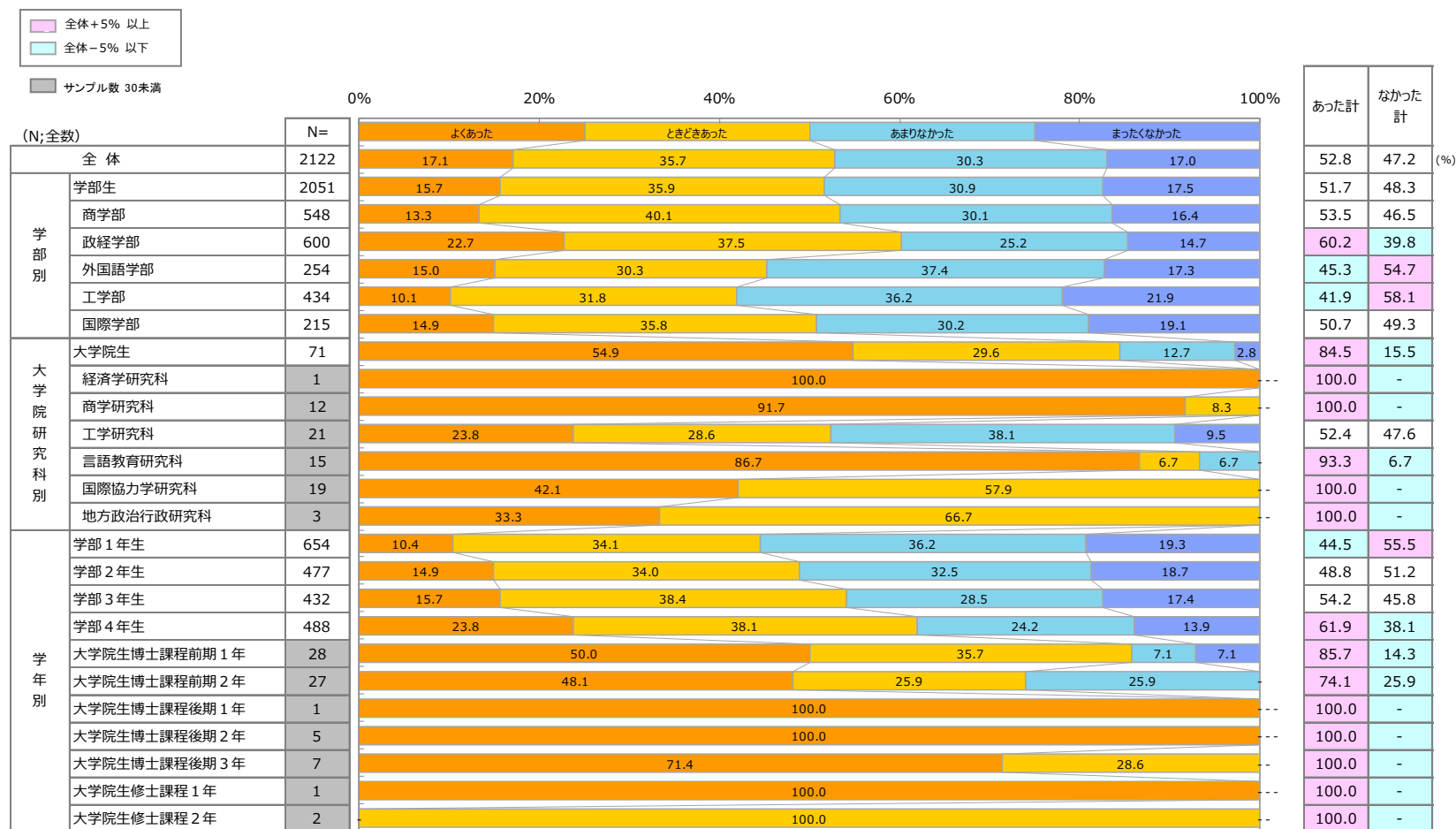
- ・教職員への学修に関する相談経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の42.6%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の57.4%を下回る。
- ・学部別では、外国語学部、工学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、外国語学部が51.2%（全体より+8.6pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が74.6%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無

Q14.授業や課題のために図書館で資料・文献を調べたことがありましたか。(SA)

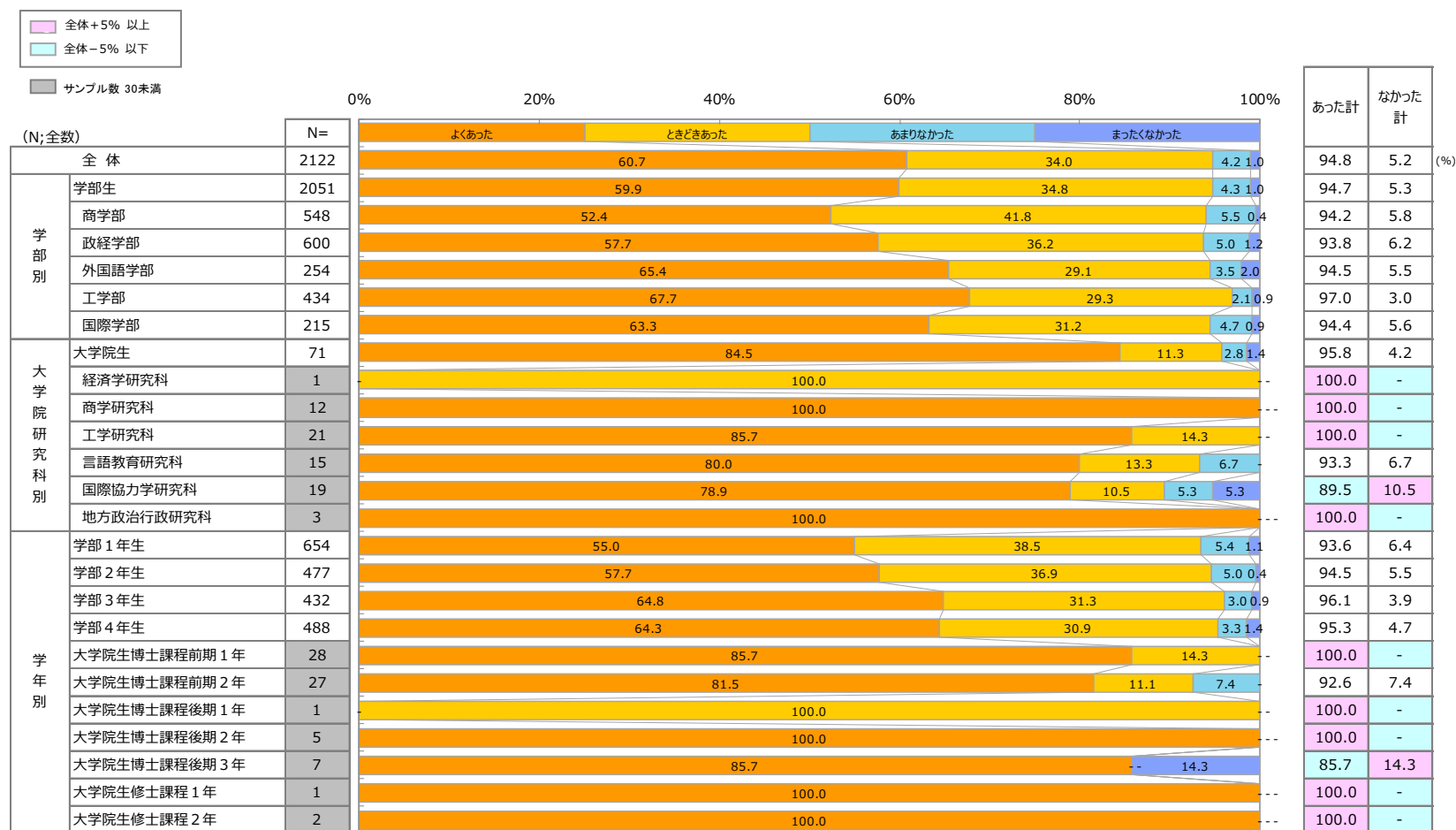
- ・授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の52.8%と、「なかった計（あまりなかった＋まったくなかった）」の47.2%を上回る。
- ・学部別では、政経学部、商学部、国際学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、政経学部が60.2%（全体より＋7.4pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が84.5%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無

Q15.授業や課題のためにインターネットで情報を集めたりしたことがありますか。(SA)

- ・授業や課題のためインターネットでの情報収集経験が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の94.8%に達している。
- ・各学部をみても「あった計」は95%前後と大きな差はみられない。
大学院生は「あった計」が95.8%という結果になった。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が96.1%で最も高く、続いて4年生の95.3%となった。

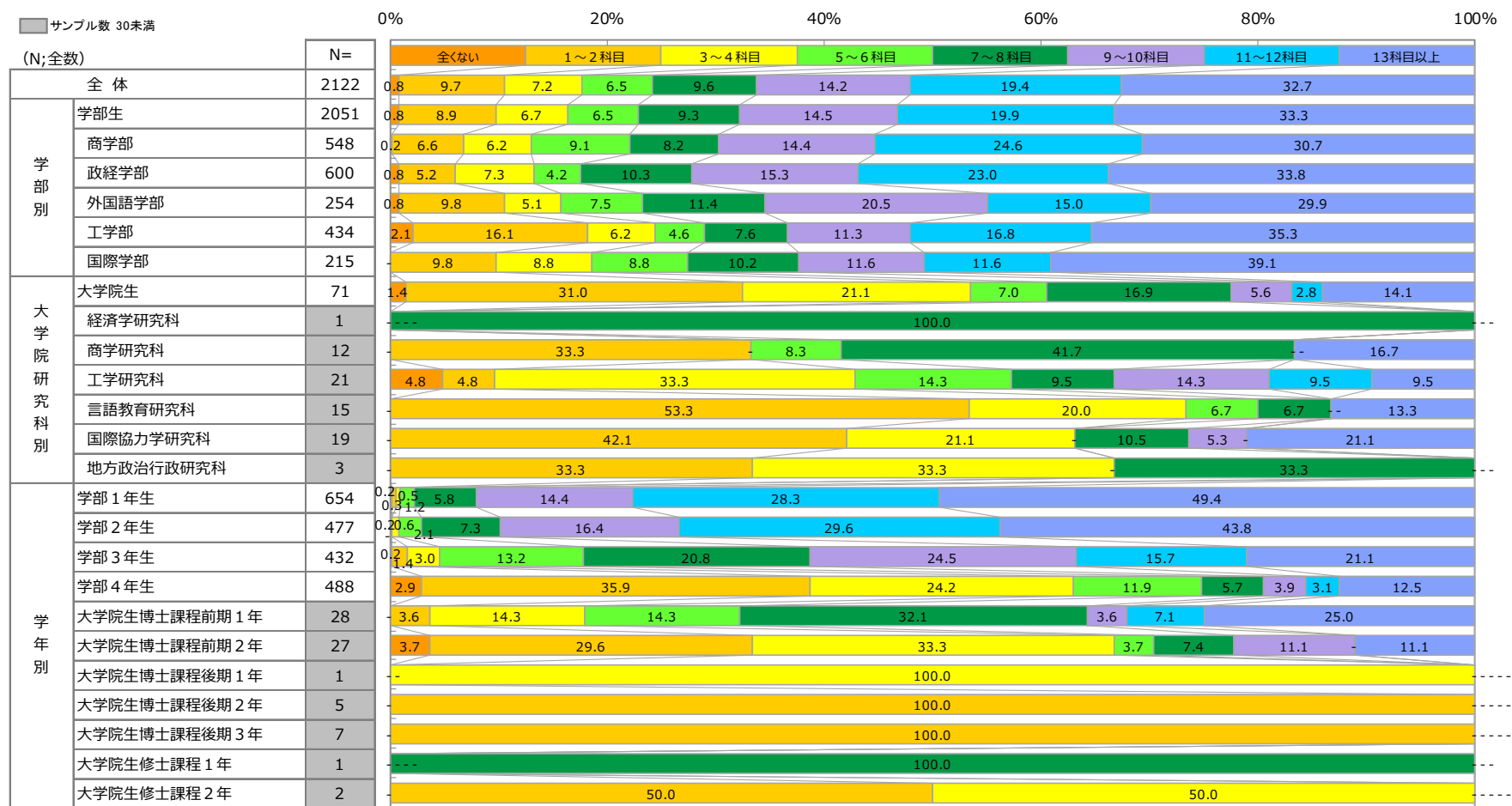


本年度の週当たりの 学修等時間

週当たりの授業出席科目数

Q16.どの程度授業に出席しましたか。(SA)

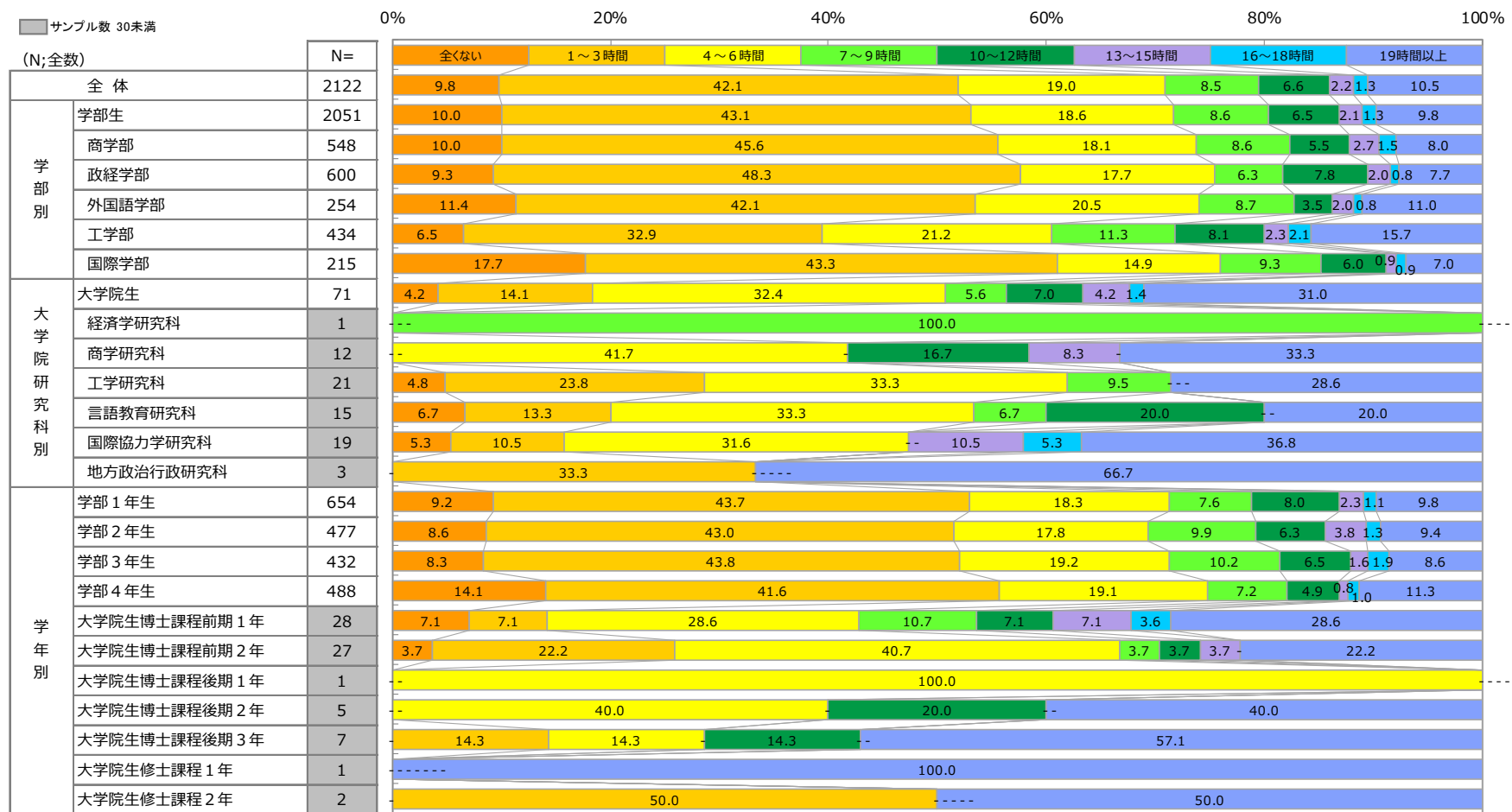
- ・週当たりの授業出席科目数は「13科目以上」が全体の32.7%で最も多い。
「11～12科目」が19.4%、「9～10科目」が14.2%で続く。
- ・学部別では、全ての学部で「13科目以上」が最も多く、国際学部が39.1%で最も高い。
大学院生は「1～2科目」(31.0%)が最も多く、以降、「3～4科目」(21.1%)、「7～8科目」(16.9%)と続く。
- ・学年別で学部生をみると、1年生、2年生は「13科目以上」が最も多い。
3年生では「9～10科目」が24.5%、4年生では「1～2科目」が35.9%で最も多い。



週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間

Q17.授業時間以外に授業と関連した学修や経験をどの程度しましたか。(SA)

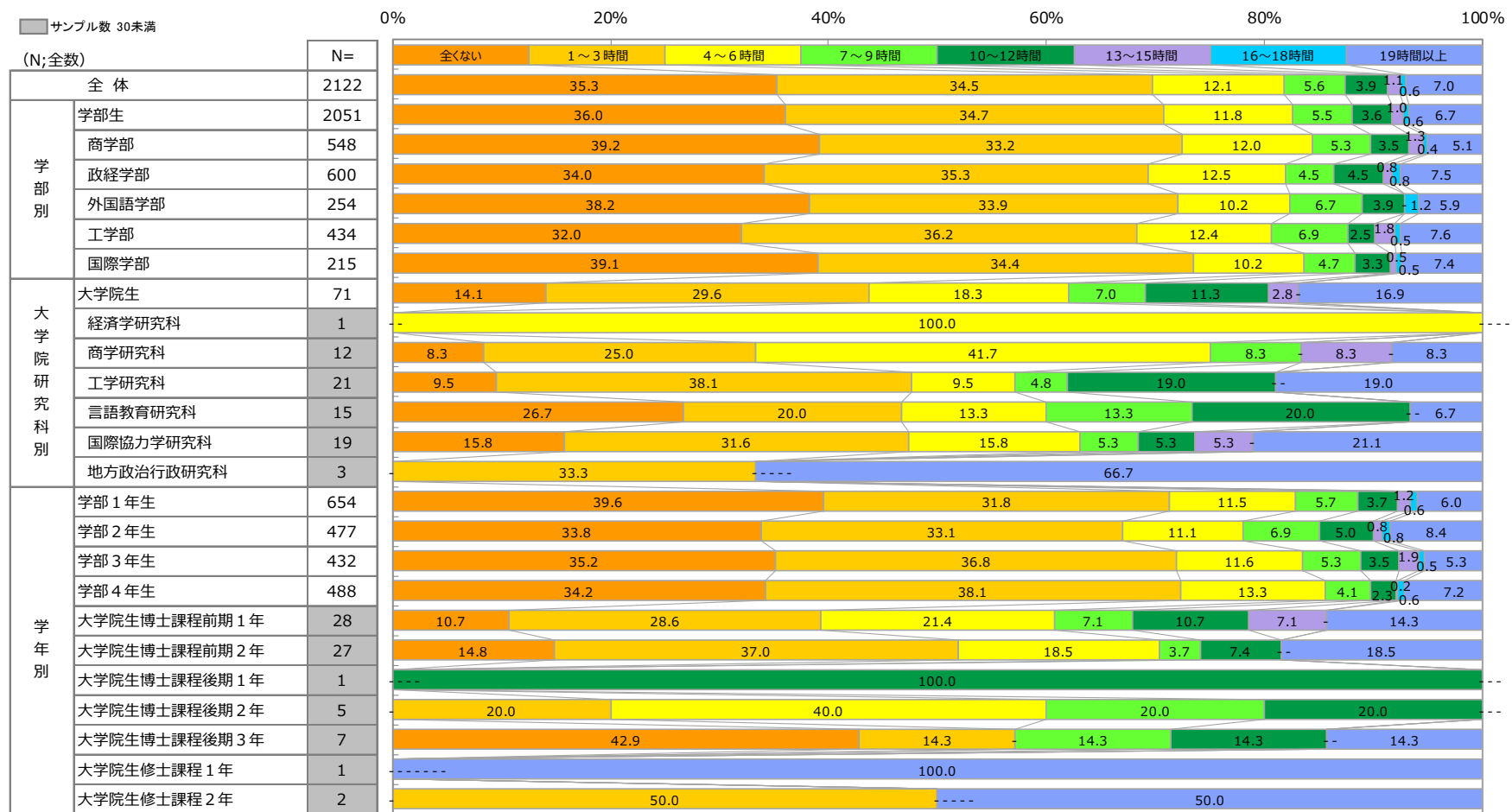
- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間は全体でみると、「1～3時間」が42.1%で最も多い。以降、「4～6時間」が19.0%、「19時間以上」が10.5%で続く。なお「全くない」は9.8%。
- ・学部別では、全ての学部で「1～3時間」が最も多く、政経学部が48.3%で最も高い。なお、工学部（15.7%）、外国語学部（11.0%）では「19時間以上」が10%以上。
- ・大学院生は「4～6時間」が32.4%で最も多い（全体より+13.4pt）。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



週当たりの授業と関連しない読書時間

Q18.授業と関連しない読書をどの程度しましたか（マンガ・雑誌を除く）。（SA）

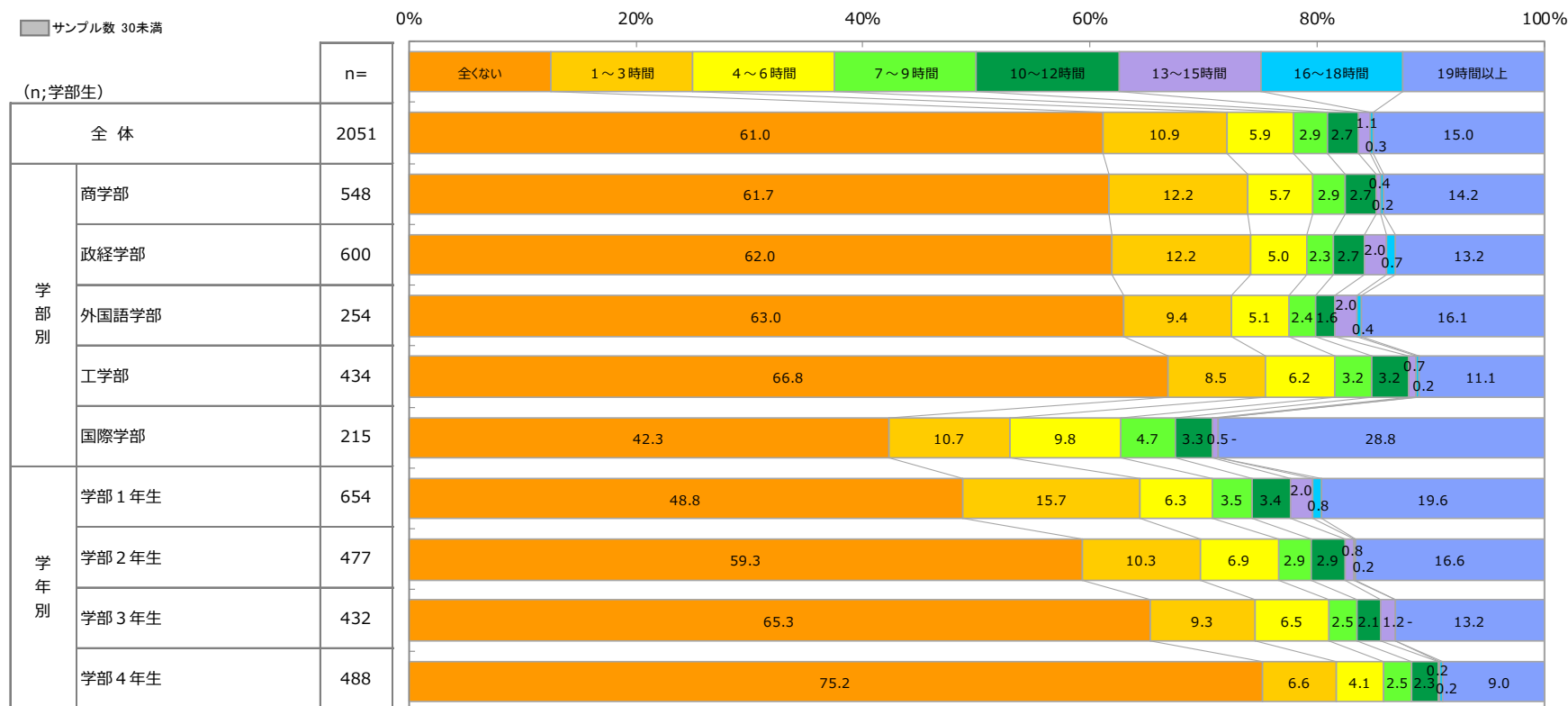
- 週当たりの授業と関連しない読書時間は全体でみると、「全くない」を除いて、「1～3時間」が34.5%で最も多い。
- 学部別で、1時間以上の合計をみると、工学部（67.9%）が最も時間を割いており、政経学部（65.9%）が続く。各学部で「1～3時間」は工学部（36.2%）が最も高い。
- 大学院生も「1～3時間」（29.6%）が最も多いが、「4～6時間」が18.3%、「19時間以上」が16.9%と、学部生より時間を割いていることが窺える。
- 学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い（「全くない」を除く）。



週当たりの部活動・サークル活動参加時間

Q19.どの程度部活動やサークル活動に参加しましたか。
(SA)

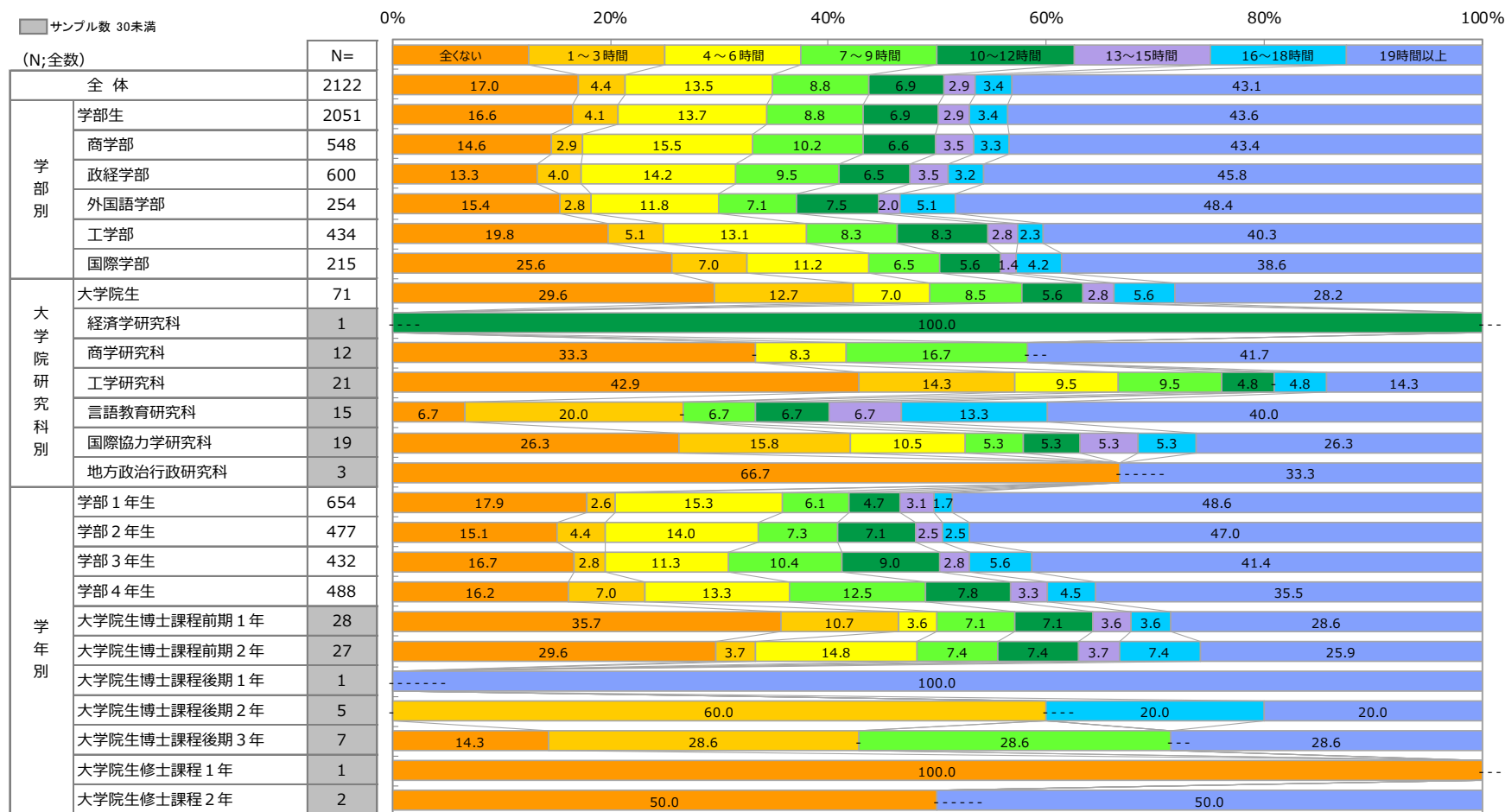
- ・学部生の週当たりの部活動・サークル活動参加時間は全体でみると、「全くない」を除いて、「19時間以上」が15.0%で最も多い。「1～3時間」が10.9%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（57.8%）が最も時間を割いており、商学部（38.3%）が続く。学部生は全ての学部で、「全くない」を除いて、「19時間以上」が最も多く、特に国際学部が28.8%と高い。
- ・学年別で学部生をみると、1年生の1時間以上の部活動・サークル活動の参加が最も多く（51.3%）、2年生（40.6%）と続く。最も低いのは4年生（24.9%）。



週当たりのアルバイト・就労時間

Q20.どの程度アルバイトや仕事をしましたか。(SA)

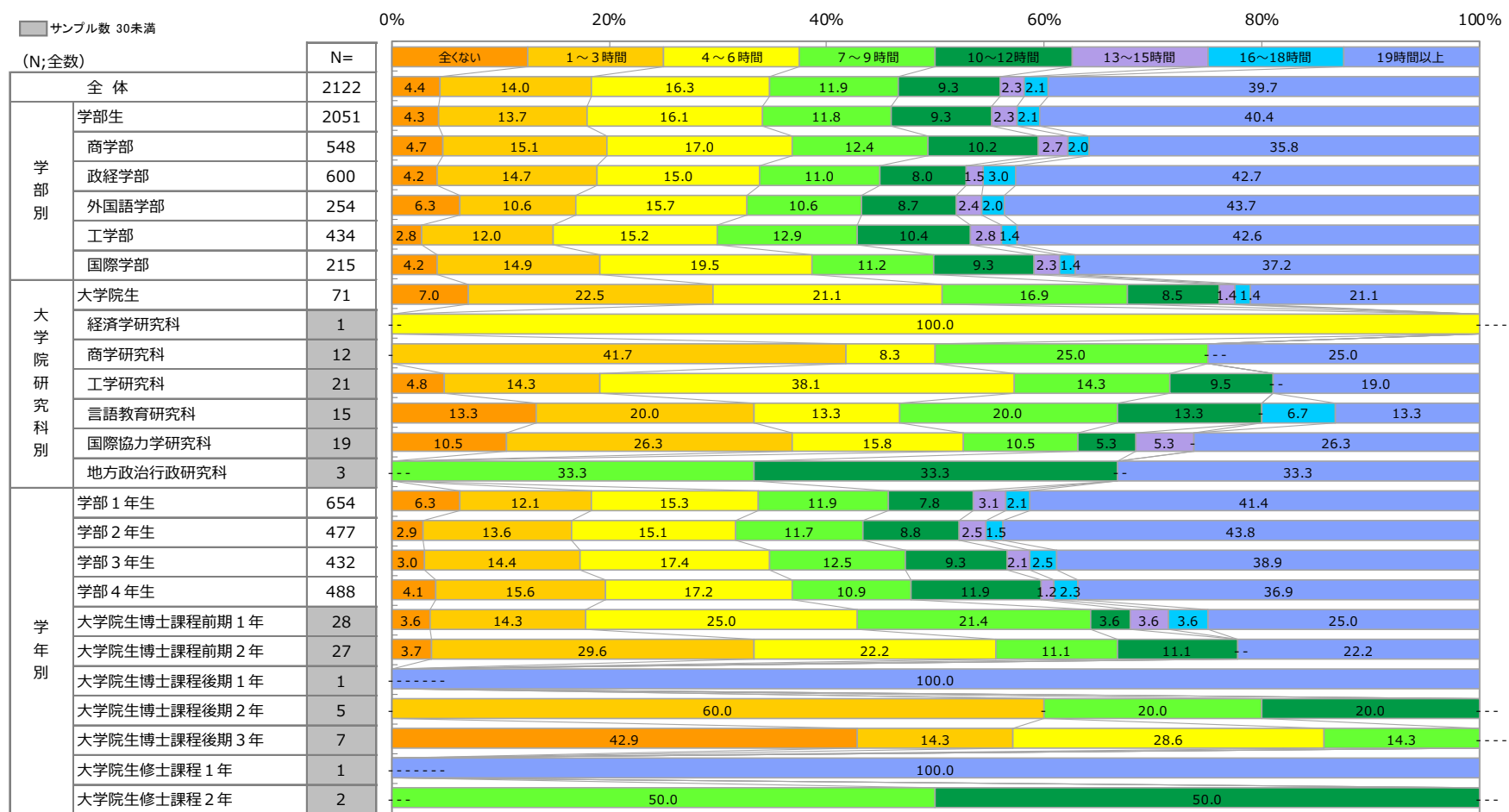
- ・週当たりのアルバイト・就労時間は全体でみると、「19時間以上」が43.1%で最も多い。「4～6時間」が13.5%、「7～9時間」が8.8%で続く（「全くない」を除く）。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、政経学部（86.7%）が最も時間を割いており、商学部（85.4%）、外国語学部（84.7%）が続く。
学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多く、外国語学部（48.4%）、政経学部（45.8%）、商学部（43.4%）、工学部（40.3%）、国際学部（38.6%）の順で高い。
- ・大学院生も、「全くない」を除いて「19時間以上」が28.2%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。



週当たりの個人的な趣味活動時間

Q21.どの程度個人的な趣味活動をしましたか。(SA)

- ・週当たりの個人的な趣味活動時間は全体でみると、「19時間以上」が39.7%で最も多い。「4～6時間」が16.3%、「1～3時間」が14.0%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、学部間での差はさほどない（いずれも90%台）。学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多い。大学院生は「1～3時間」が22.5%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。

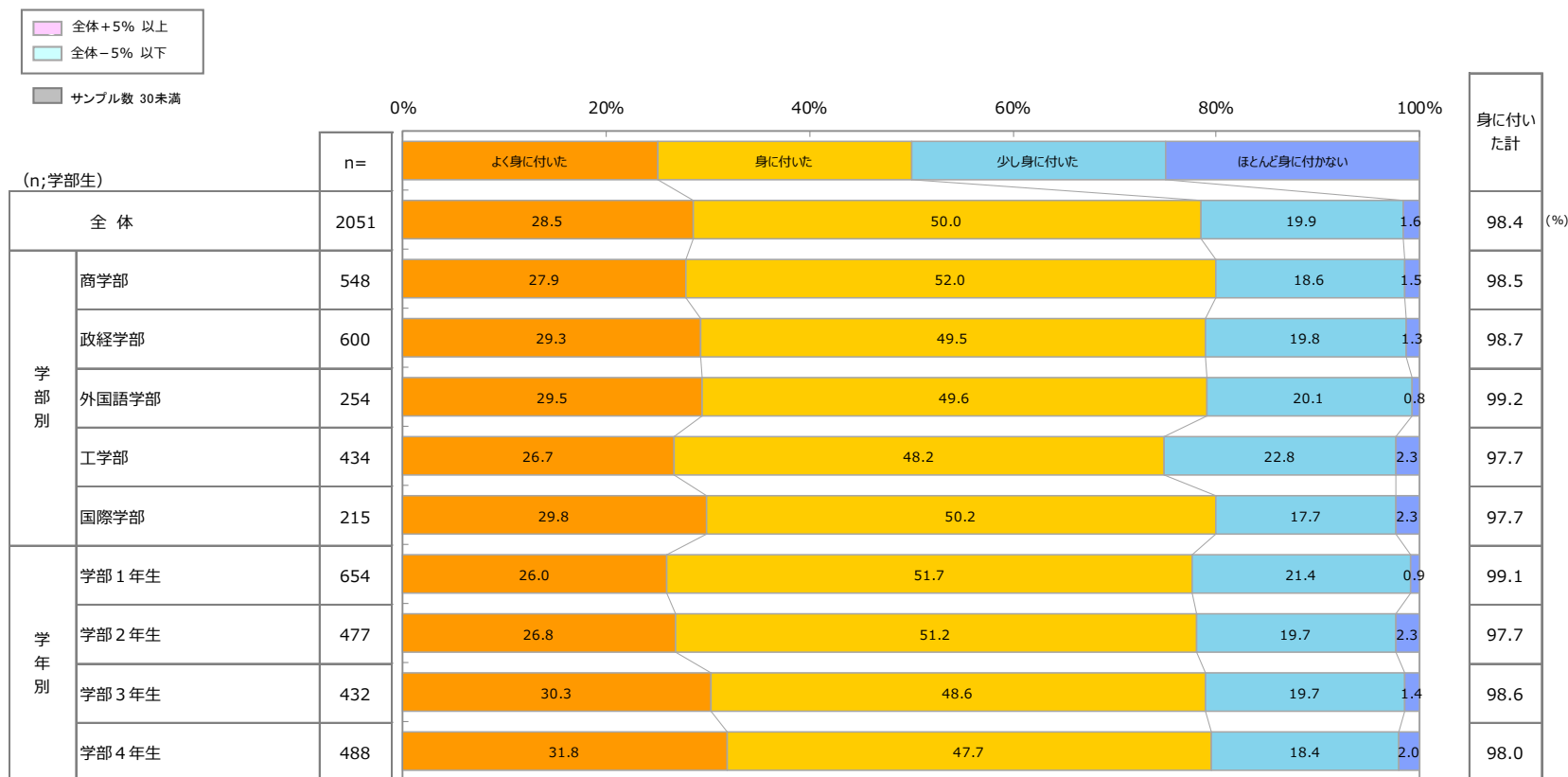


入学時と比べて現在までに
身に付いた力（学修成果）

一般的な教養

Q22. 一般的な教養が身に付き了吗。 (SA)

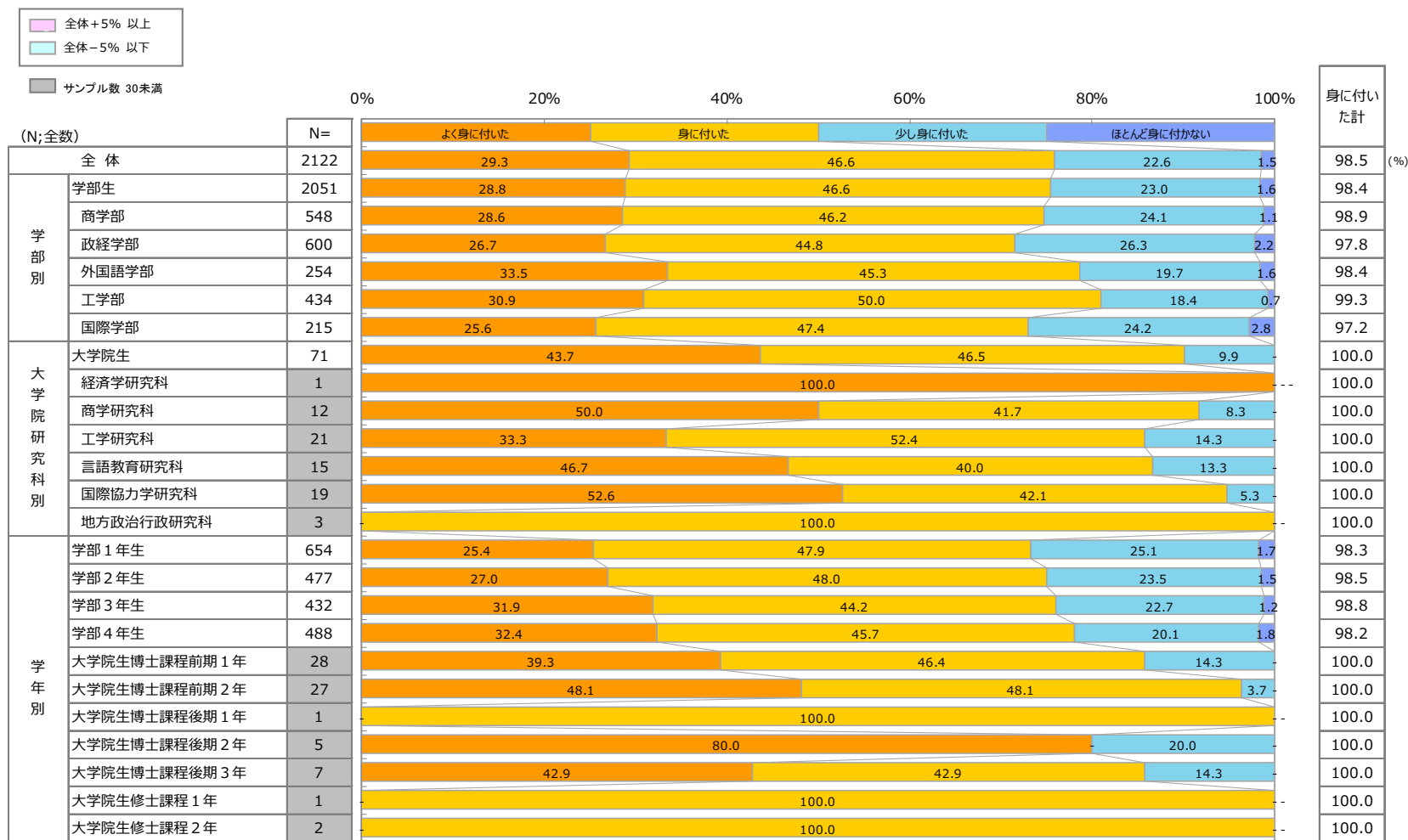
- ・学部生の一般的な教養の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の98.4%に達し、「よく身に付いた」は28.5%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、国際学部が29.8%で最も高く、外国語学部が29.5%、政経学部が29.3%と続く。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



専門分野に関する知識・技能

Q23.専門分野に関する知識・技能が身に付き了吗。(SA)

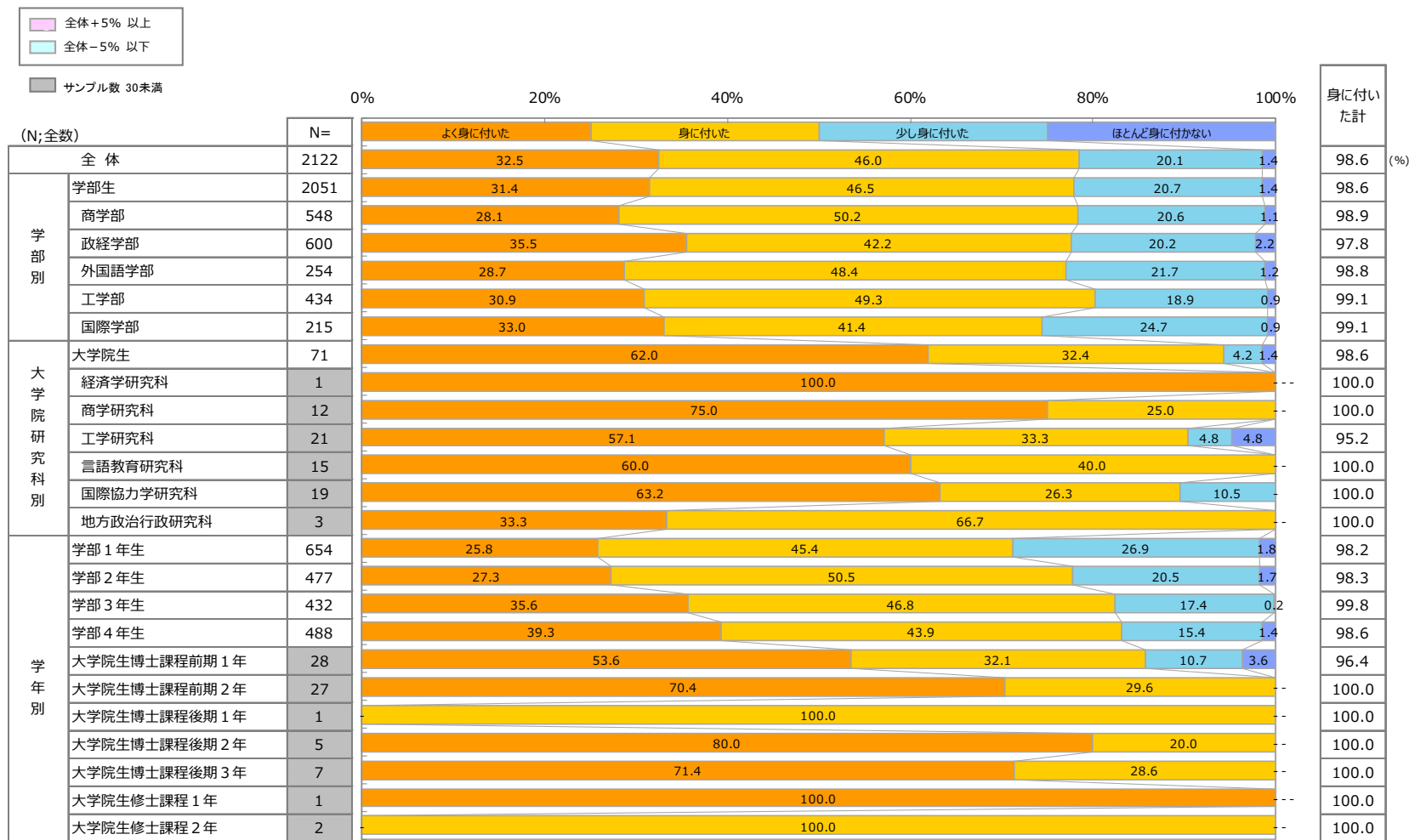
- 専門分野に関する知識・技能の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.5%に達し、「よく身に付いた」は29.3%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は外国語学部が33.5%で最も高く、工学部が30.9%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が43.7%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力

Q24.情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力は身に付きましたか。(SA)

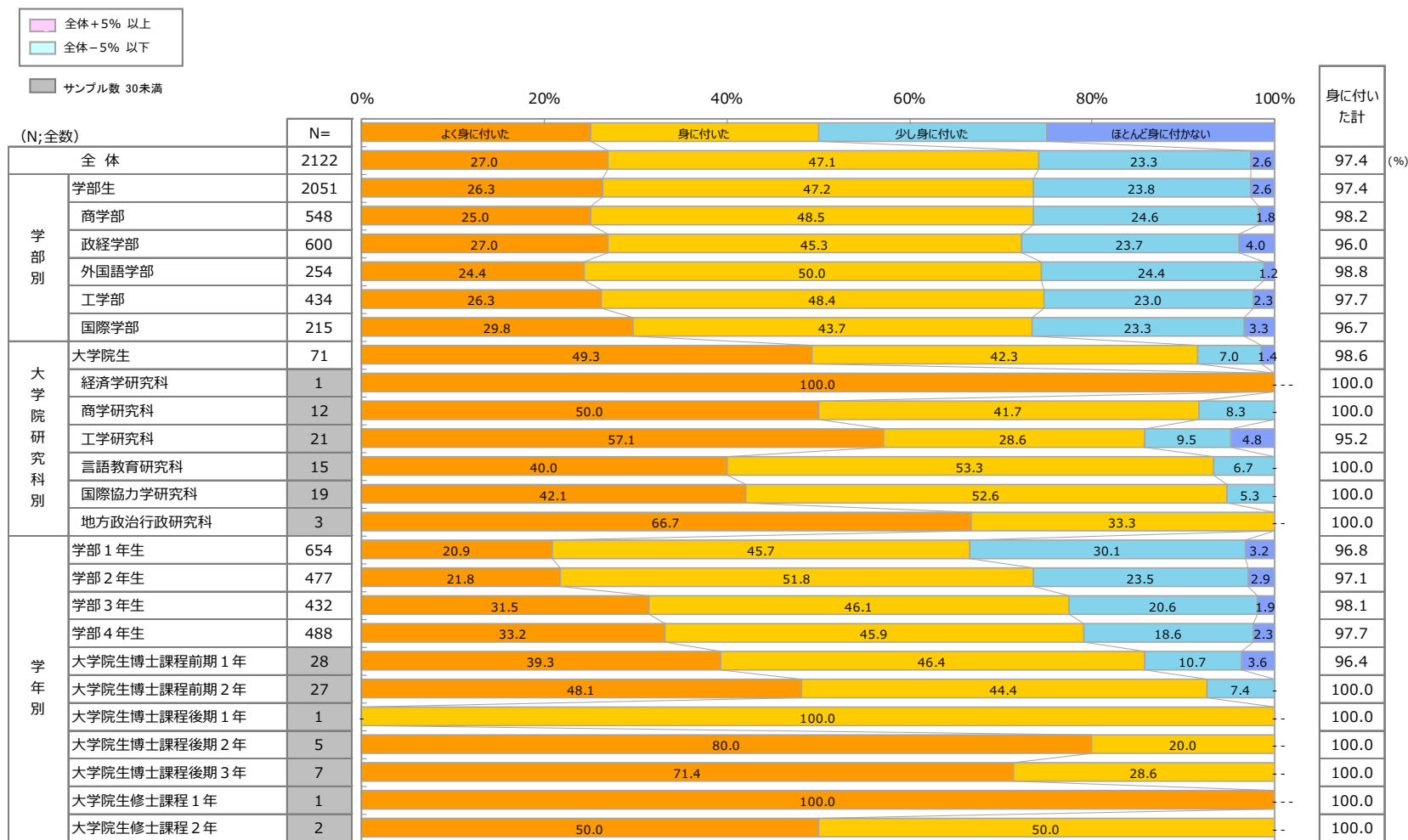
- ・情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の98.6%に達し、「よく身に付いた」は32.5%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上で、「よく身に付いた」はいずれも25%以上。大学院生は「身に付いた計」が98.6%に達し、「よく身に付いた」が62.0%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力

Q25.物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力は身に付きましたか。(SA)

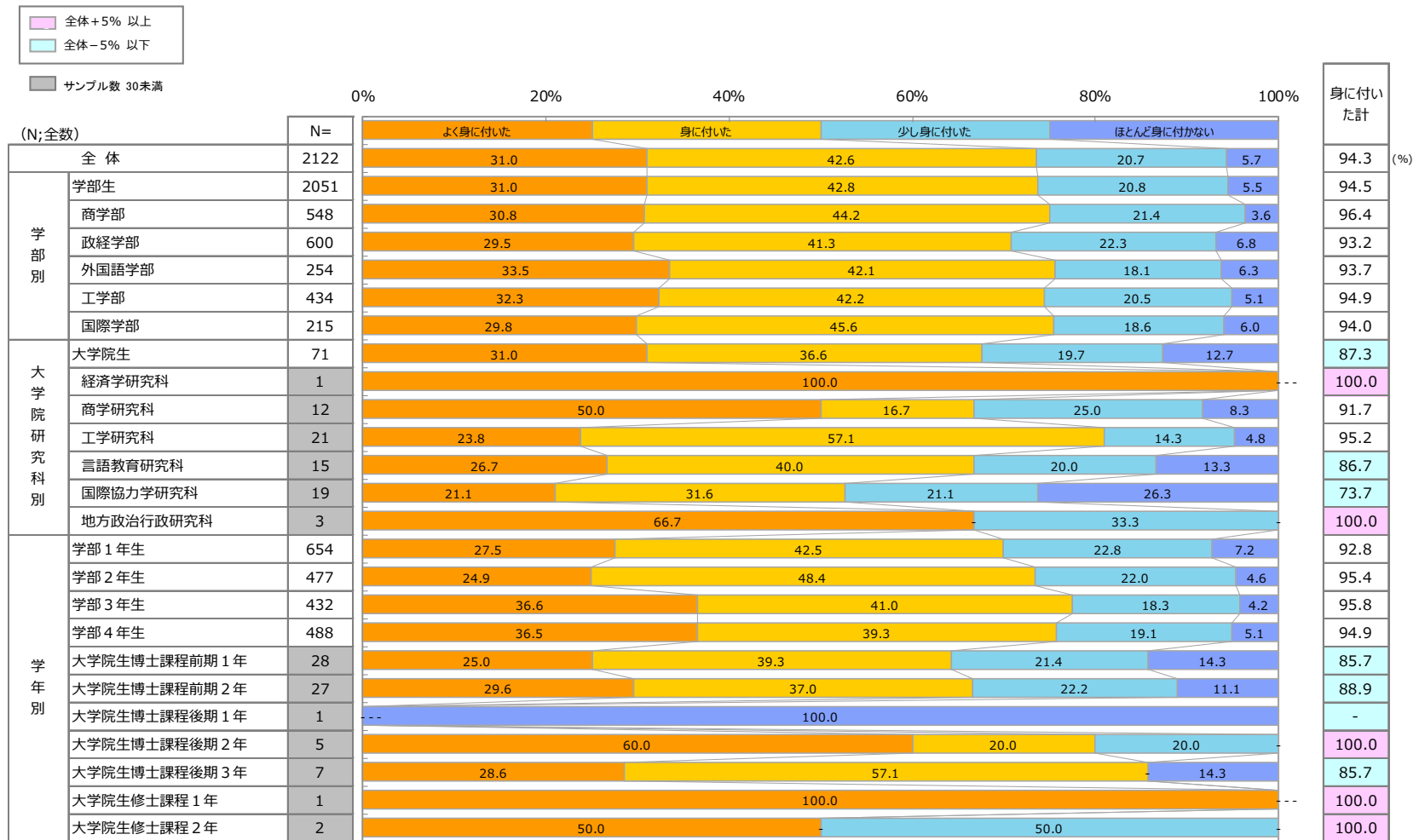
- 物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.4%に達し、「よく身に付いた」は27.0%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上で、「よく身に付いた」は国際学部が29.8%で最も高く、政経学部が27.0%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が98.6%に達し、「よく身に付いた」が49.3%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



他の人と協力して物事を進めていく力

Q26.他の人と協力して物事を進めていく力は身に付きま
したか。(SA)

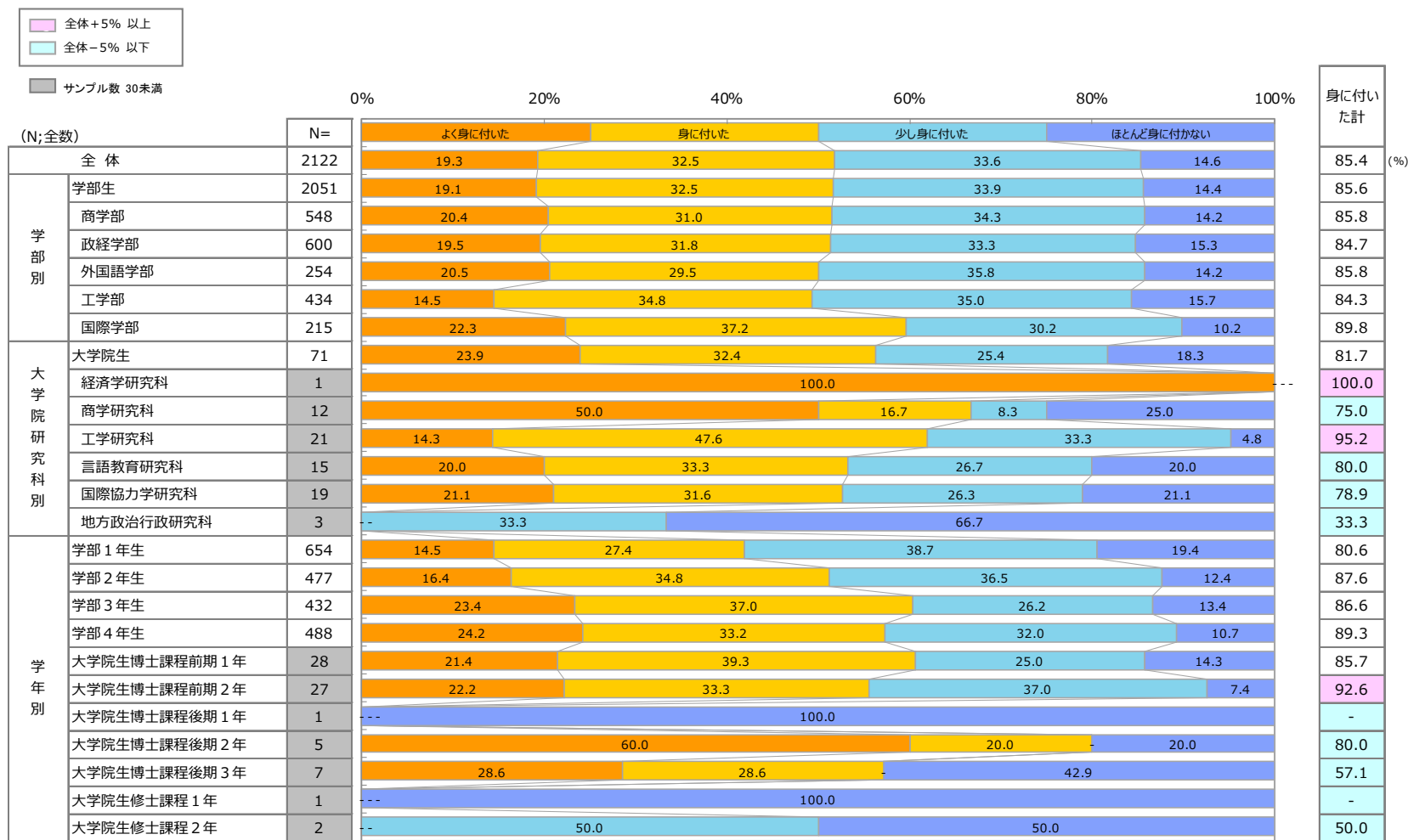
- ・他の人と協力して物事を進めていく力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の94.3%に達し、「よく身に付いた」は31.0%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が90%以上で、「よく身に付いた」は外国語学部が33.5%で最も高く、工学部が32.3%と続く。
大学院生は「身に付いた計」は87.3%で、「よく身に付いた」は31.0%。
- ・学年別で学部生の「よく身に付いた」をみると、3年生が36.6%で最も高く、続くのは4年生の36.5%となった。



必要な場合のリーダーシップを発揮できる力

Q27.必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は身に付きましたか。(SA)

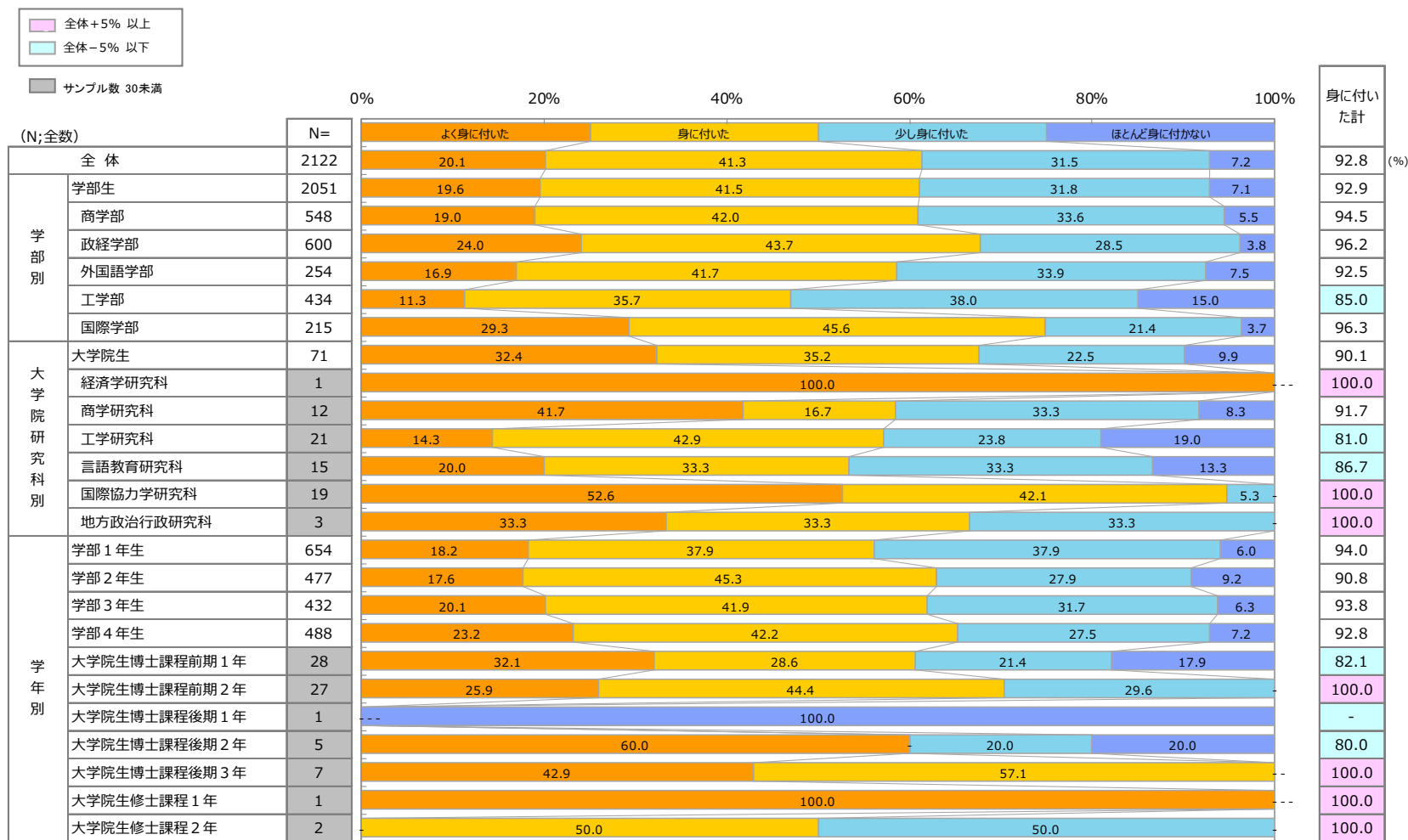
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の85.4%に達し、「よく身に付いた」は19.3%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部（89.8%）が最も高く、商学部（85.8%）と続く。「よく身に付いた」をみると、国際学部が22.3%と最も高い。
- ・大学院生は「身に付いた計」が81.7%で、「よく身に付いた」は23.9%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力

Q28.社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力は身に付き了吗。（SA）

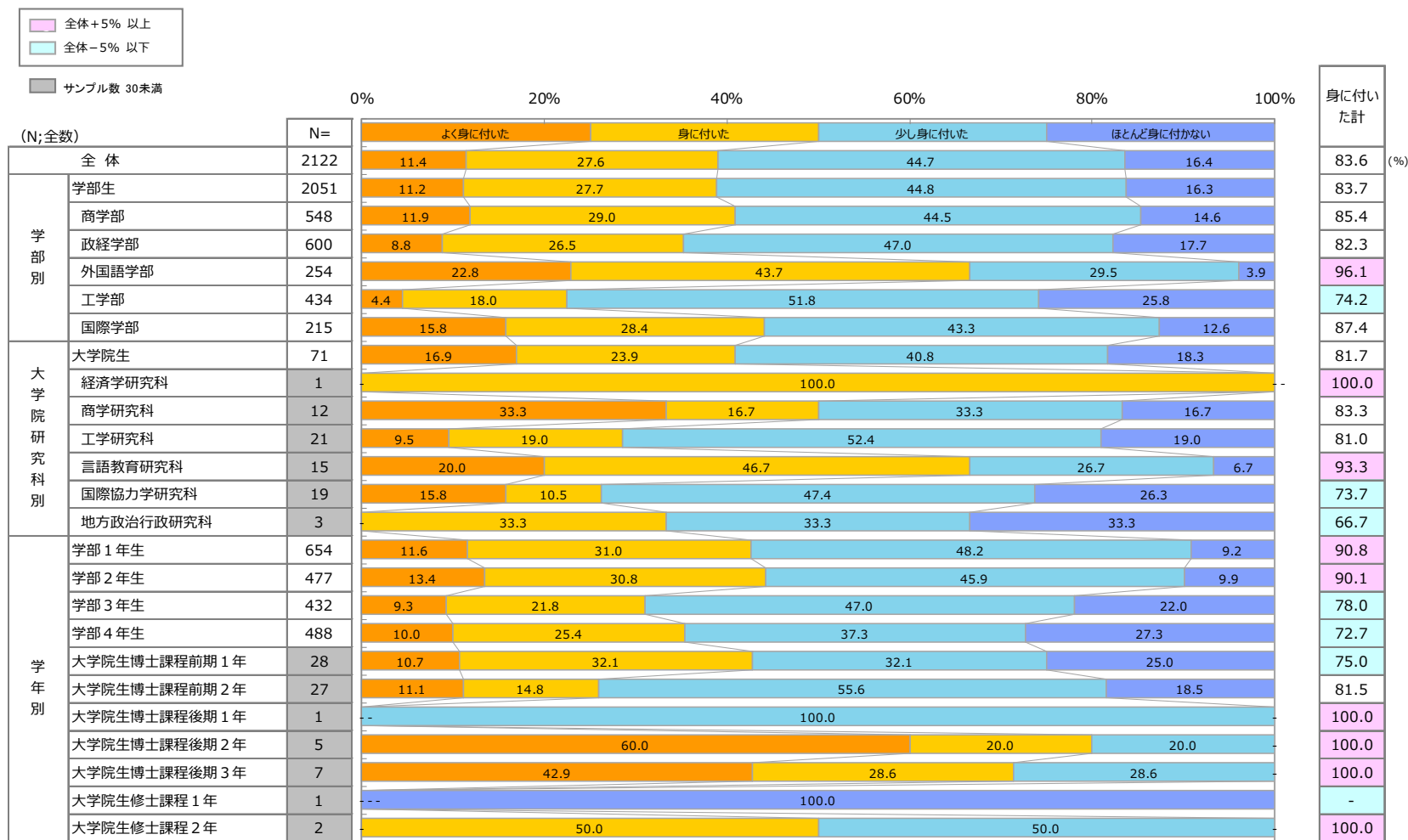
- ・社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の92.8%に達し、「よく身に付いた」は20.1%となった。
- ・学部別では、国際学部で「身に付いた計」が96.3%と最も高く、政経学部が96.2%と続く。「よく身に付いた」をみると、国際学部が29.3%と最も高い。
- ・大学院生は「身に付いた計」が90.1%に達し、「よく身に付いた」が32.4%となった。
- ・学年別で学部生の「よく身に付いた」をみると、4年生が23.2%で最も高く、続くのは3年生の20.1%となった。



外国語の運用能力

Q29.外国語の運用能力は身に付きましたか。(SA)

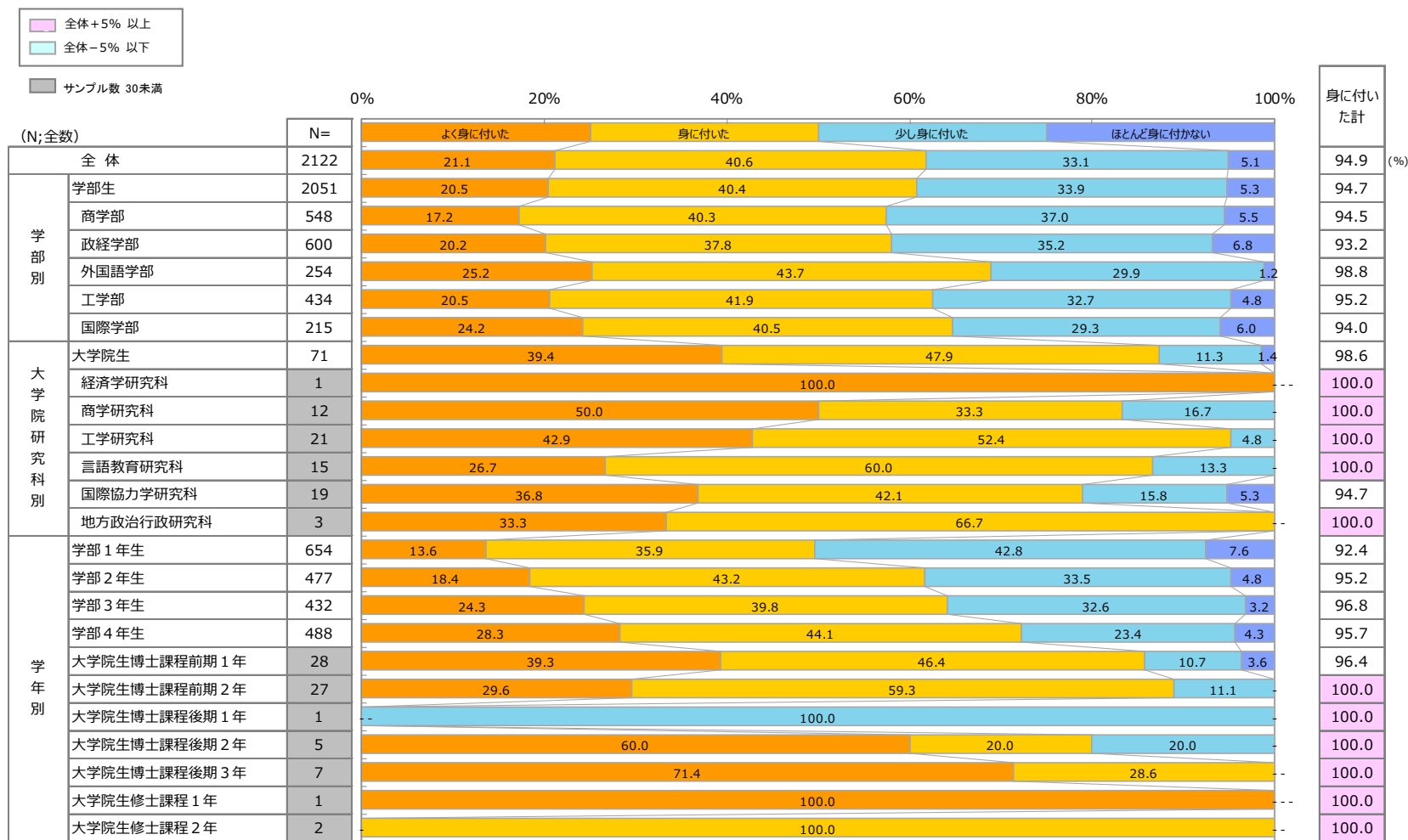
- ・外国語の運用能力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の83.6%となり、「よく身に付いた」は11.4%となった。
- ・学部別では、外国語学部で「身に付いた計」が96.1%に達し、国際学部が87.4%で続く。「よく身に付いた」をみても、外国語学部が22.8%と最も高く、国際学部が15.8%で続く。大学院生は「身に付いた計」が81.7%で、「よく身に付いた」が16.9%となった。
- ・学年別で学部生をみると、「よく身に付いた」は各学年10%程度。



学修した内容をまとめて、それを発表する力

Q30.学修した内容をまとめて、それを発表する力は身に付きましたか。(SA)

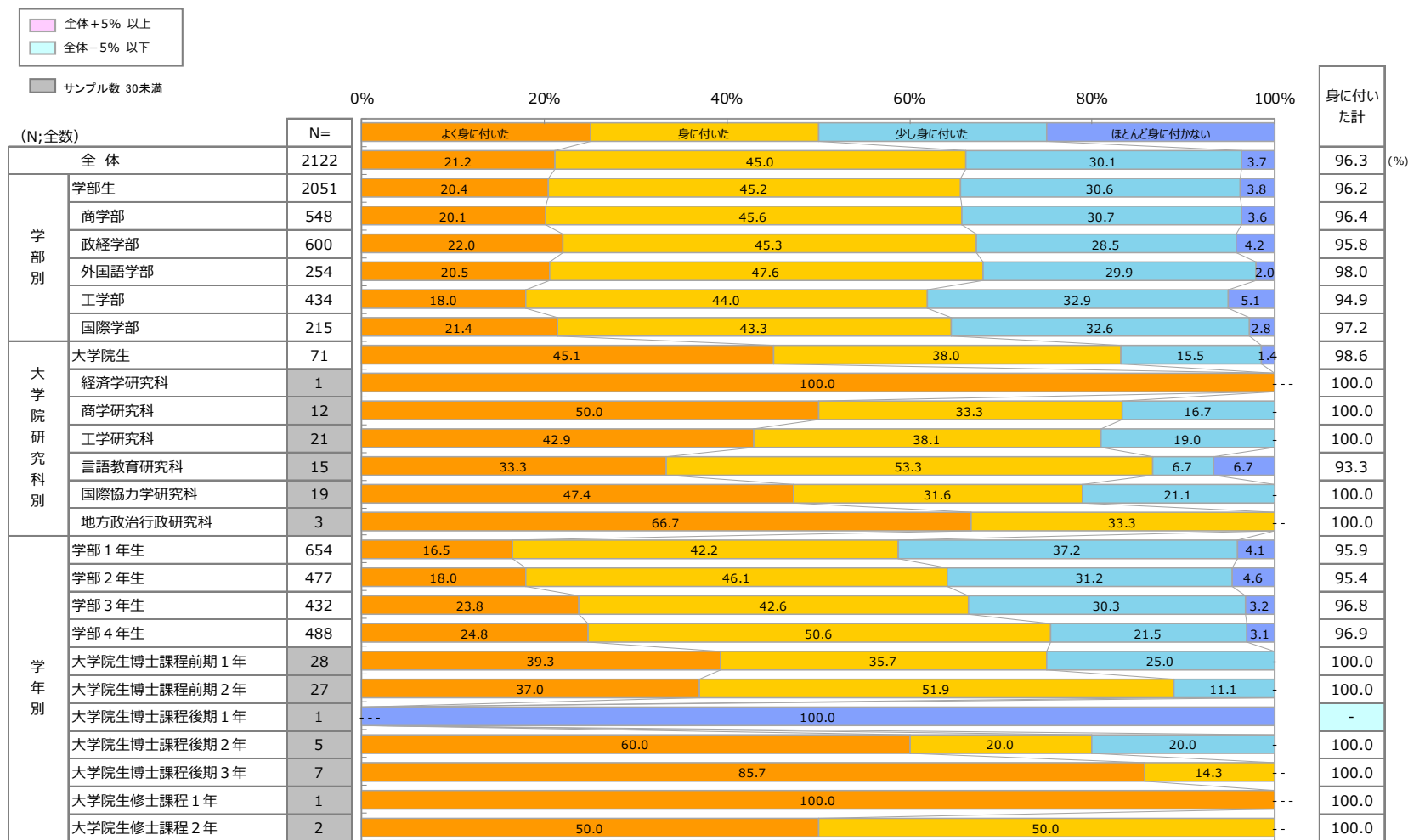
- 学修した内容をまとめて、それを発表する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の94.9%に達し、「よく身に付いた」は21.1%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が90%以上。
「よく身に付いた」をみると、外国語学部が25.2%と最も高く、国際学部が24.2%で続く。
大学院生は「身に付いた計」が98.6%に達し、「よく身に付いた」が39.4%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



表現すべき内容を文章にして書ける力

Q31.表現すべき内容を文章にして書ける力は身に付きま
したか。(SA)

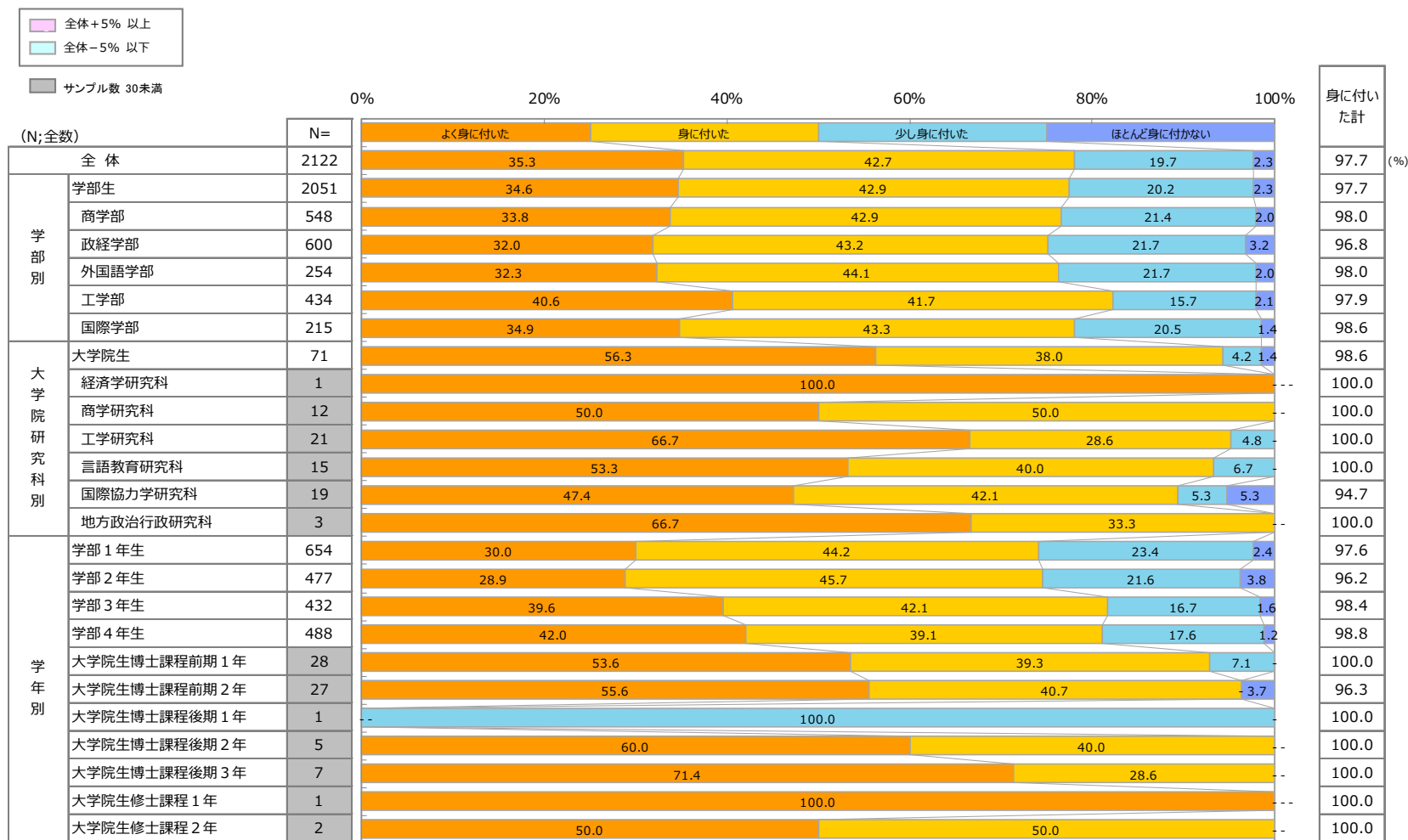
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の96.3%に達し、「よく身に付いた」は21.2%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は、全ての学部で90%以上。
「よく身に付いた」をみると、政経学部が22.0%と最も高く、国際学部が21.4%で続く。
大学院生は「身に付いた計」が98.6%に達し、「よく身に付いた」が45.1%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



パソコンで文書や資料を作成する力

Q32.パソコンで文書や資料を作成する力は身に付きましたか。(SA)

- ・パソコンで文書や資料を作成する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.7%に達し、「よく身に付いた」は35.3%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、各学部で30%以上。
大学院生は「身に付いた計」が98.6%に達し、「よく身に付いた」が56.3%となった。
- ・学年別で学部生の「よく身に付いた」をみると、4年生が42.0%で最も高く、続くのは3年生の39.6%となった。

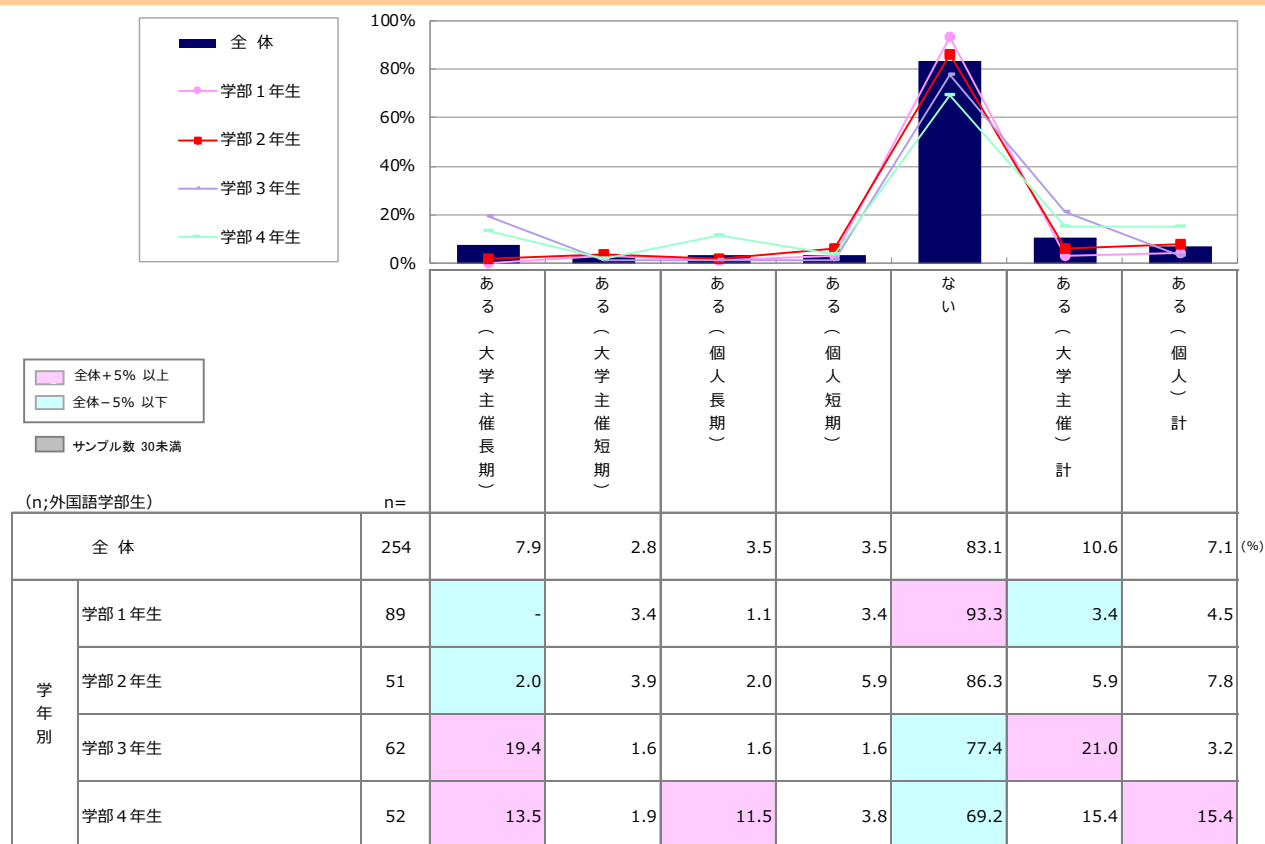


学部設問項目

海外での語学研修経験

Q33.海外で語学研修をしたことがありますか（入学以来本年度3月までの実施予定も含む）。（MA）
（外国語学部生のみ）

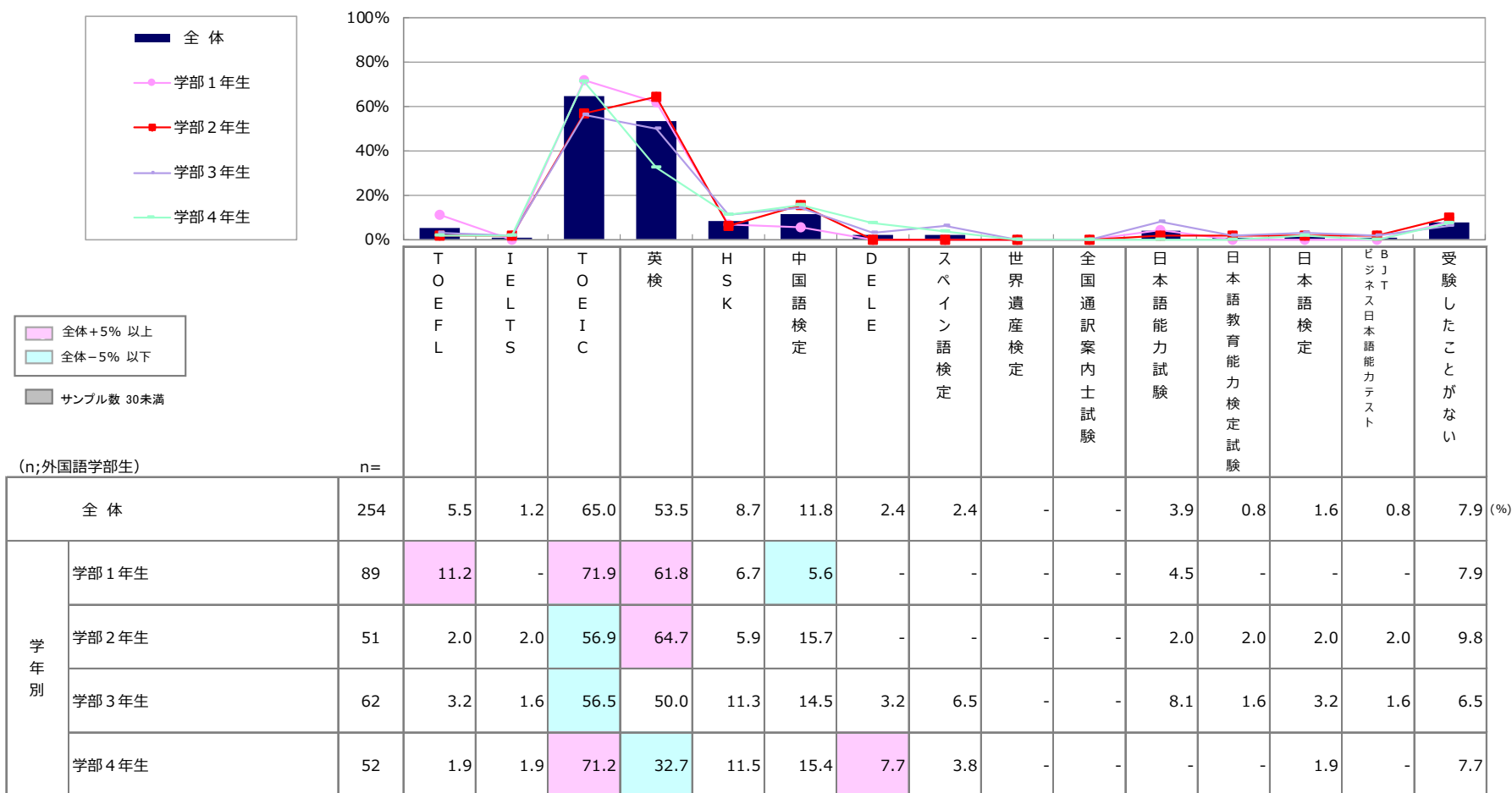
- ・外国語学部生の海外での語学研修経験は「ない」が83.1%。
「ある（大学主催）」計は10.6%と、「ある（個人）」計（7.1%）を上回る。
- ・学年別では、1年生は「ある（大学主催短期）」「ある（個人短期）」がともに3.4%と、長期より短期の割合が高い。
2年生は「ある（個人短期）」（5.9%）が最も高く、「ある（大学主催短期）」（3.9%）と続き、
長期より短期の割合が高い。
3年生は「ある（大学主催長期）」（19.4%）が最も高く、
大学主催の語学研修経験の方が個人の語学研修経験よりも高い。
4年生は「ある（大学主催長期）」（13.5%）、「ある（個人長期）」（11.5%）と、短期より長期の割合が高い。



語学検定試験受検有無

Q34.語学に関する検定試験を受検したことがありますか。
(MA) (外国語学部生のみ)
※以下の検定試験を受検したことがない方は、何もチェックせずに、次に進んでください。

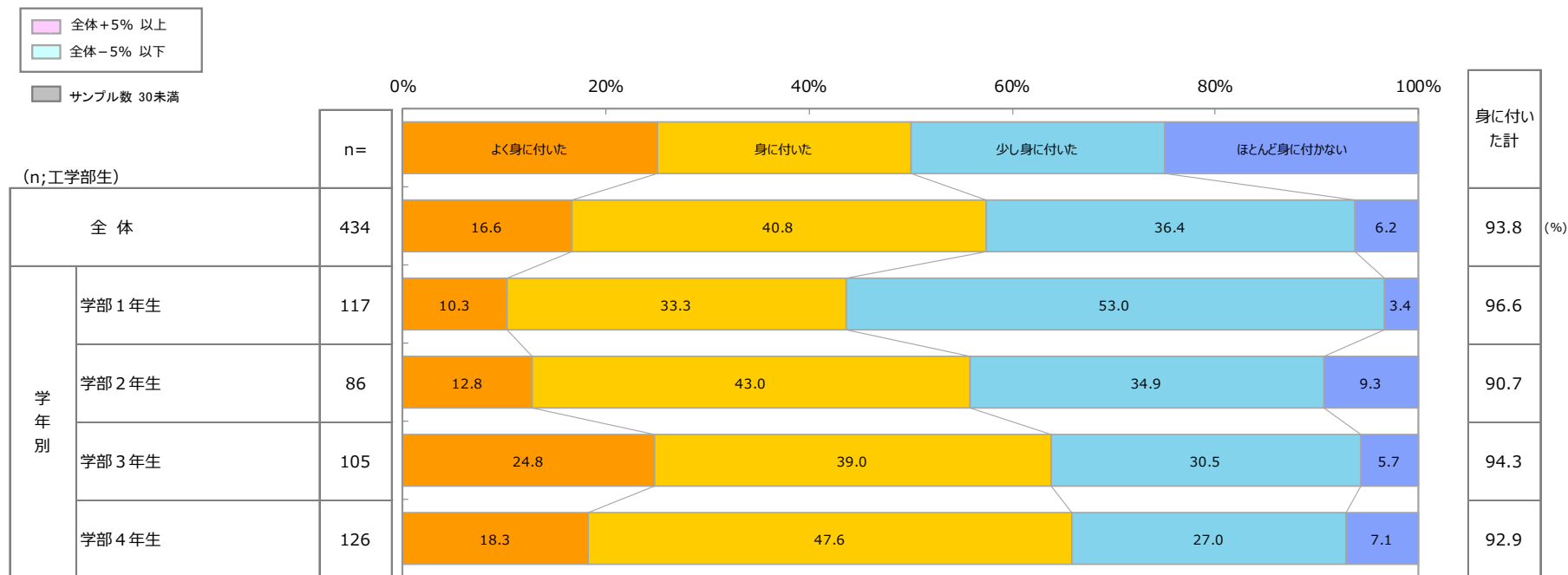
- ・受検経験がある語学検定試験は「TOEIC」が65.0%、「英検」が53.5%と英語の検定が上位にあがり、「中国語検定」が11.8%で続く。
- ・学年別でみると、「TOEIC」は1年生が71.9%と最も高く、3年生が56.5%と最も低い。「英検」は2年生が64.7%と最も高く、4年生が32.7%と最も低い。「中国語検定」は2年生が15.7%と最も高く、1年生が5.6%と最も低い。



リーダーシップ能力や課題に対する解決能力

Q35.実験・実習・演習によって、リーダーシップ能力や課題に対する解決能力が身に付きましたか。(SA)
(工学部生のみ)

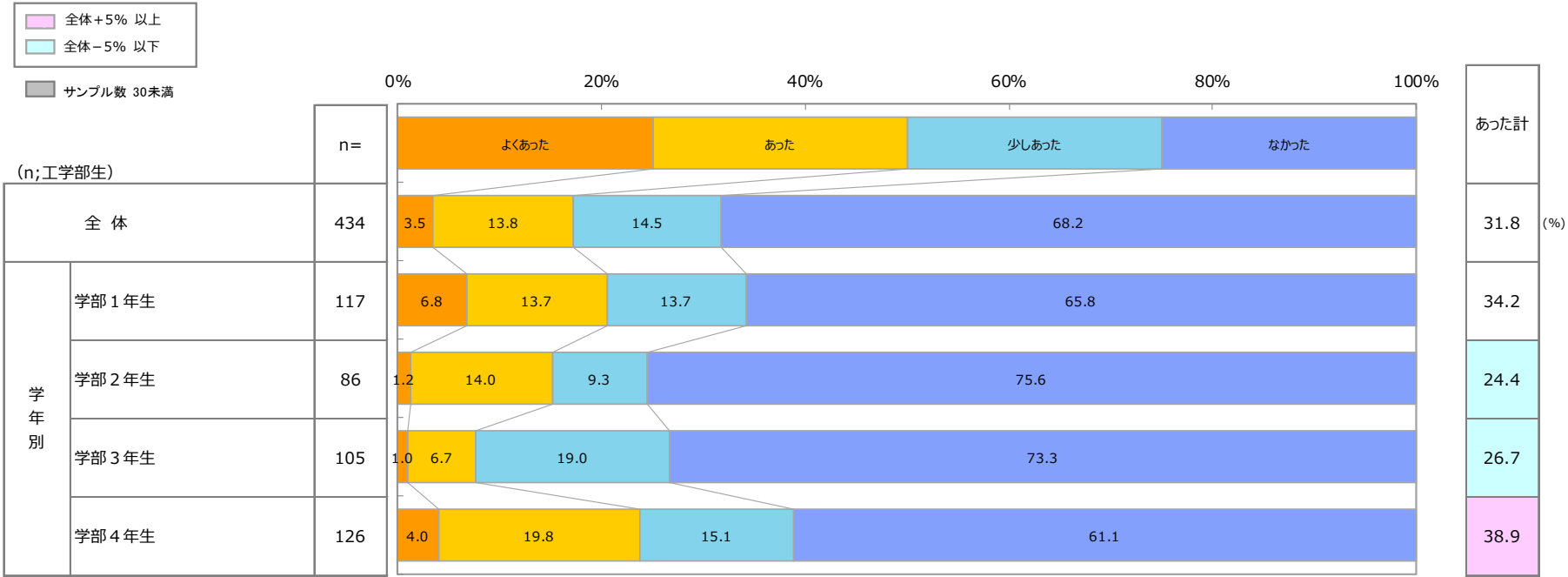
- 工学部生のリーダーシップ能力や課題に対する解決能力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の93.8%に達し、「よく身に付いた」は16.6%となった。
- 学年別では、全ての学年で「身に付いた計」が90%以上。
「よく身に付いた」をみると、3年生が24.8%と最も高い。



コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会の有無

Q36. (コラボコースの学生への質問) コラボコースの授業を履修して、他学科の教員や学生と話す機会がありましたか。(SA) (工学部生のみ)

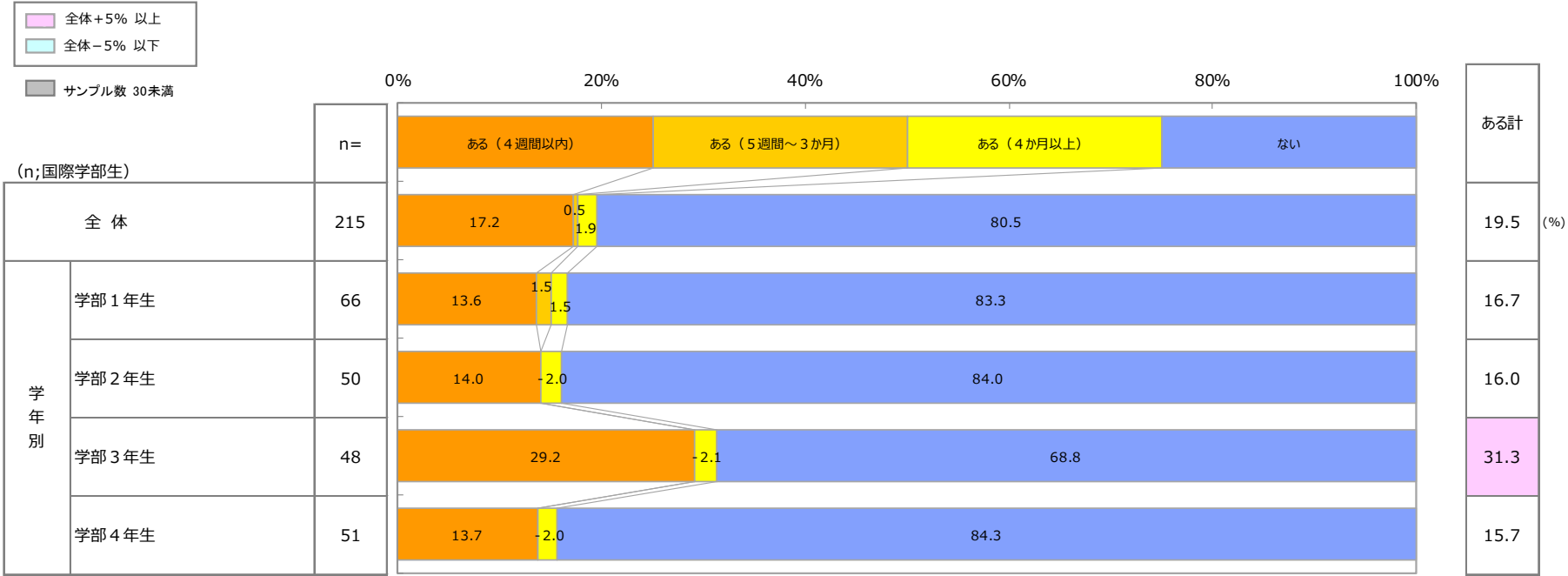
- ・ コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会が「あった計（よくあった+あった+少しあった）」は全体の31.8%。
- ・ 学年別でみると、「あった計」は4年生が38.9%と最も高く、2年生が24.4%と最も低い。



海外研修経験

Q37.海外研修に参加したことがありますか、あるいは3月までに参加する予定がありますか。(海外短期研修・語学留学、海外ゼミ合宿、個人研修奨学金、長期留学、海外インターンシップ等) (SA)
(国際学部生のみ)

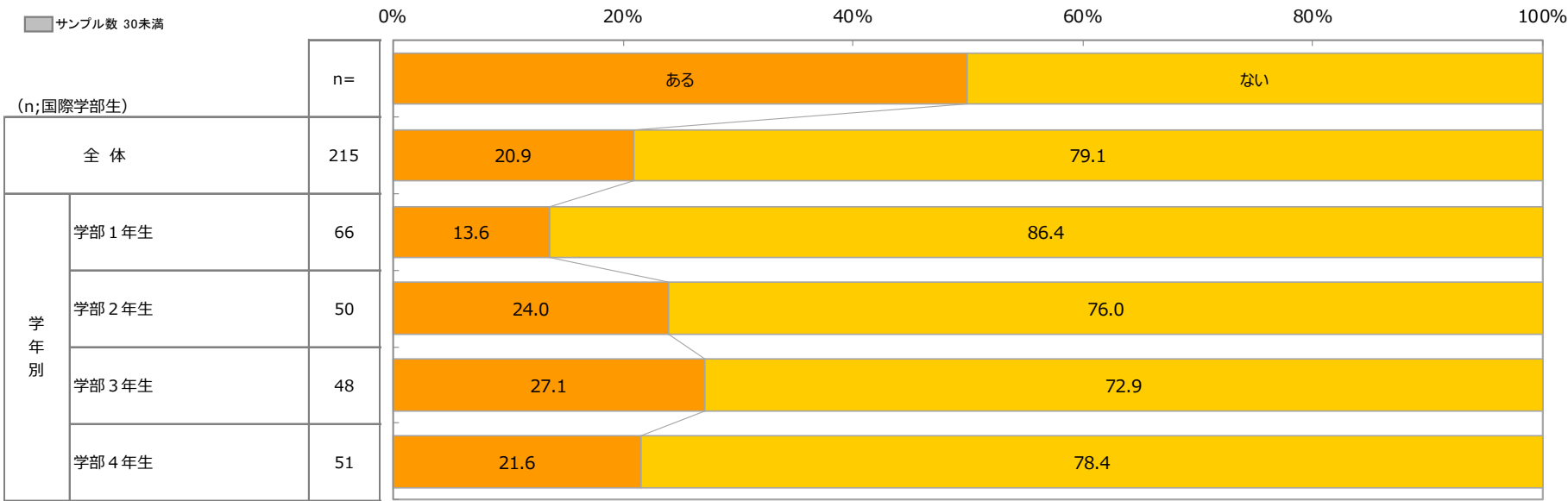
- 国際学部生の海外研修経験が「ある計（ある（4週間以内）+ある（5週間～3か月）+ある（4か月以上））」は全体の19.5%、「ない」が80.5%。
- 学年別では、「ない」を除いて全ての学年で「ある（4週間以内）」が最も多い。「ある（4週間以内）」では、3年生が29.2%と最も高い。



国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加有無

Q38.入学以来、国内、国外におけるボランティア活動や
NGO活動に参加したことがありますか。（SA）
（国際学部生のみ）

- ・ 国際学部生の国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加経験は「ある」20.9%。
- ・ 学年別でみると、参加経験率は3年生が27.1%で最も高く、1年生が13.6%で最も低い。



学修行動調査結果 に対する所見

1. 本年度の授業の中での経験について

令和2年度、令和4年度（以下「過去2年間」という。）の結果と比較すると、No. 1～4の4つの設問項目は、令和2年度と令和4年度で上昇傾向となっており、令和4年度と令和5年度では大きな変化は見受けられない。また、No. 5、6においては、若干の数値の上下はあるものの90%を超える高い数値で推移している。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	自分の考えや課題を発表する授業	76.5	83.3	84.8
2	教員への質問・意見を述べたことの経験	63.2	67.9	67.8
3	学生同士が議論する授業	59.8	73.1	74.0
4	演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	39.1	58.5	60.7
5	定期的な小テスト・レポートのある授業	97.6	95.6	95.3
6	Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	98.1	98.1	97.6

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較すると、令和2年度と令和4年度で全ての設問項目が上昇したが、令和4年度と令和5年度ではNo. 1が上昇したもののNo. 2～4の3つの設問項目では減少傾向にある。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	52.0	77.5	80.3
2	教職員への学修に関する相談経験	31.9	43.5	42.6
3	授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	32.5	56.9	52.8
4	授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	95.1	95.4	94.8

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較すると、No. 4「部活動・サークル活動参加時間」が1～3時間から19時間以上に変わっていることから、コロナ禍が明けて部活動・サークル活動が再開され、活動が活発に行われていることが窺える。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	授業出席科目数	13科目以上（46.4％）	13科目以上（29.6％）	13科目以上（32.7％）
2	授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間（39.3％）	1～3時間（41.1％）	1～3時間（42.1％）
3	授業と関連しない読書時間	1～3時間（38.1％）	1～3時間（38.3％）	1～3時間（34.5％）
4	部活動・サークル活動参加時間	1～3時間（8.7％）	1～3時間（13.6％）	19時間以上（15.0％）
5	アルバイト・就労時間	19時間以上（30.2％）	19時間以上（38.3％）	19時間以上（43.1％）
6	個人的な趣味活動時間	19時間以上（29.5％）	19時間以上（33.8％）	19時間以上（39.7％）

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率（単位：％）

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、特にNo. 5「協働力」、No. 6「リーダーシップ」、No. 9「発表能力」の3つの設問項目が令和2年度と令和4年度で大幅に数値が上昇しており、令和4年度と令和5年度においても若干ではあるものの上昇傾向にある。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	一般的な教養	95.4	97.5	98.4
2	専門分野に関する知識・技能	95.8	97.9	98.5
3	情報収集力	96.8	98.4	98.6
4	課題発見・解決能力	95.6	97.7	97.4
5	協働力	79.2	94.1	94.3
6	リーダーシップ	69.3	84.3	85.4
7	社会が直面する課題の理解	90.8	93.3	92.8
8	外国語運用能力	81.8	84.1	83.6
9	発表能力	84.7	92.5	94.9
10	文章表現能力	93.8	95.0	96.3
11	パソコンで資料を作成する力	97.7	97.6	97.7

※「身に付いた計(よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた)」の比率(単位：%)

(2)長所と課題

No. 6「リーダーシップ」とNo. 8「外国語運用能力」を除く設問項目は90%を超える高い数値を示しており、No. 6「リーダーシップ」とNo. 8「外国語運用能力」においても80%を超えていることから、概ね学修成果を達成していると考えられる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、大きな課題はみられない。全て遠隔授業で実施した令和2年度と一部科目(教養教育・語学・専門科目)のみ遠隔授業として対面授業を行った令和4年度、5年度でNo. 5「協働力」、No. 6「リーダーシップ」及びNo. 9「発表能力」の3つの設問項目が大幅に数値が上昇している。このことは、より対面授業の方が教育効果が高い部分があることが窺える。併せて、令和4年度から授業時間を90分から105分に変更したことにより、授業の構成をより柔軟に行うことが出来るようになったことも影響していることが想定される。引き続き、アクティブラーニングなどの手法を用いた多様で魅力的な授業をより一層拡充し、学生の興味関心と学びの主体性を高めることが求められる。

1. 本年度の授業の中での経験について

令和2年度、令和4年度（以下、「過去2年間」と表記）の結果と比較すると、No.3及び4の設問項目が令和2年度に比べ令和4年度で20%程度上昇し、その値を令和5年度も維持している。No.5、6では令和2年度から令和5年度まで大きな変化はみられないが、いずれも95%を超える高い数値で推移している。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	自分の考えや課題を発表する授業	72.0	80.1	79.2
2	教員への質問・意見を述べたことの経験	57.0	59.3	59.7
3	学生同士が議論する授業	54.1	74.3	73.7
4	演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業	33.0	53.4	51.8
5	定期的な小テスト・レポートのある授業	97.0	96.4	95.3
6	Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	98.6	98.1	98.7

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

いずれの項目も経年とともに数値が上昇または同水準を維持している。そのなかでもNo.4は90%を超える高い数値を維持している。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	47.7	79.6	84.5
2	教職員への学修に関する相談経験	26.1	37.3	35.6
3	授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	31.1	51.4	53.5
4	授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	95.5	94.7	94.2

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較し、変動がみられるのはNo.1「授業出席科目数」とNo.4「部活動・サークル活動参加時間」である。No.1は「13科目以上」が最も多いのは変わらないものの、その割合がコロナ禍にあった令和2年度と比べ減少している。No.4は「1～3時間」から「19時間以上」に最大値が変わっていることから部活動・サークル活動の再開が推測される。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	授業出席科目数	13科目以上(48.3)	13科目以上(26.3)	13科目以上(30.7)
2	授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(42.4)	1～3時間(46.3)	1～3時間(45.6)
3	授業と関連しない読書時間	1～3時間(36.2)	1～3時間(37.0)	1～3時間(33.2)
4	部活動・サークル活動参加時間	19時間以上(9.7)	1～3時間(15.1)	19時間以上(14.2)
5	アルバイト・就労時間	19時間以上(34.2)	19時間以上(39.6)	19時間以上(43.4)
6	個人的な趣味活動時間	19時間以上(31.2)	19時間以上(32.1)	19時間以上(35.8)

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率（単位：％）

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、No.5「協働力」、No.6「リーダーシップ」、No.9「発表能力」が令和2年度から令和4年度で数値が11.4～18.9%上昇し、令和5年度においても同水準を維持している。

No.	設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
1	一般的な教養	94.5	97.7	98.5
2	専門分野に関する知識・技能	95.0	97.4	98.9
3	情報収集力	95.8	97.4	98.9
4	課題発見・解決能力	94.7	97.3	98.2
5	協働力	76.4	94.7	96.4
6	リーダーシップ	67.9	86.8	85.8
7	社会が直面する課題の理解	90.5	94.1	94.5
8	外国語運用能力	81.1	83.6	85.4
9	発表能力	80.0	91.4	94.5
10	文章表現能力	94.5	95.7	96.4
11	パソコンで資料を作成する力	97.4	98.3	98.0

※「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)の比率(単位: %)

(2) 長所と課題

過去2年間の結果と比較すると、令和5年度は各設問項目が85.8～98.9%と極めて高い数値をしめしていることから、概ね学修成果を達成していると思われる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

すべて遠隔授業だった令和2年度にはNo.5「協働力」やNo.6「リーダーシップ」が他の項目に比べて低調だったが、一部科目を除き対面授業となった令和4年度ではNo.5及び6の数値が18.3%、18.9%と大幅に上昇し、令和5年度も引き続き高い値を維持している。「協働力」や「リーダーシップ」の育成には対面授業から得られる学修効果が大きいことが改めて確認できる。商学部ではPBLやアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた授業が多く開講されているが、これらの形態の学修には「協働力」「リーダーシップ」が欠かせないため、引き続き学生の主体的な学びを高める方策が求められる。

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」について、「あった計(よくあったときどきあった)」(以下、有無の回答は同様)が、令和2年度学修行動調査結果(以下、令和2年度)では71.8%、令和4年度学修行動調査結果(以下、令和4年度)では79.6%、令和5年度学修行動調査結果(以下、令和5年度)では80.8%であり、令和5年度は、過去2年と比べて高い。それらの数値は、令和2年度では、全学部の中で最低値となっているが、令和4年度及び令和5年度では、最低値とはなっていないものの、全体に比べて4%ほど低い。

「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」については、令和2年度61.5%、令和4年度では62.4%であったが、令和5年度では60.5%となり、過去2年間と比較すると最低値、また全体よりも7.3%低い。

「学生同士が議論する授業有無」については、いずれの年度で全体に比べて5%以上、下回っている。また、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」については、いずれの年度で全体の割合を10%以上、下回っている。

「定期的な小テスト・レポートのある授業有無」「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無」については、いずれの年度で、全体の割合を上回っている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

令和5年度は、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」については、過去2年よりも上昇、「教職員への学修に関する相談経験有無」については、いずれの年度も全体の割合を下回っている。「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」については、いずれの年度で全体の割合を5%以上、上回っている。

「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」については、いずれの年度で90%以上を上回っており、全体の割合と比べても、大きな差は見られない。

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

「過当たりの授業出席科目数」について、いずれの年度で「13科目以上」の割合が最も高い。「過当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」「過当たりの授業と関連しない読書時間」「過当たりの部活動・サークル活動参加時間」について、いずれの年度で「全くない」を除いて、「1～3時間」の割合が最も高い。「過当たりのアルバイト・就労時間」「過当たりの個人的な趣味活動時間」は、いずれの年度で「19時間以上」の割合が最も高い。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

令和5年度は、「一般的な教養」「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」「学修した内容をまとめて、それを発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」の5項目において、令和2年度及び令和4年度と比べて上昇している。

(2)長所と課題

(1)での達成状況のうち、特に令和2年度との比較では、「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」の2項目では20%以上の上昇となり、他の項目よりも大きな上昇幅であることから、これらの項目では大きな学修成果を達成していると考えられる。

しかしながら、「専門分野に関する知識・技能」「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「他の人と協力して物事を進めていく力」「外国語の運用能力」の各項目においては、令和4年度と比べると低下している。これは、「1.本年度の授業の中での経験について」で述べたように、「自分の考えや課題を発表する授業有無」「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」「学生同士が議論する授業有無」「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の各項目において、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の割合が、各学部よりも低い割合であることが反映していると考えられる。そのため、対面・遠隔両授業において、これら低下傾向の項目に対応するような授業の展開が課題となる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

政経学部では、令和7年度より新カリキュラムを導入する。新カリキュラムにおいて、(2)で低下傾向となった各項目に対応した改善をしなければならない。

「専門分野に関する知見・技能」への対応として、専門科目において、学問の体系に則った主要科目で構成される順次性のあるカリキュラムを令和7年度より導入し、学生が専門性を高めることを可能にする。

「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」、及び「他の人と協力して物事を進めていく力」への対応として、研修科目を履修登録科目として配置し、研修と事前・事後学修を組み合わせで十分な学修時間を確保するとともに、アクティブ・ラーニング科目のメニューを増やすことで、問題意識を育む科目を拡充する。また、「4年ゼミナール」に加えて、プログラムの最後に、課題についての解決策をグループで議論・作成して発表する「実践科目」を配置し、学生が何らかの形で卒業成果を出して卒業するようにする。

「外国語の運用能力」への対応として、外国語を地域言語として位置付けを変更し、グローバルスタディーズプログラムの中で、地域研究とともに、地域言語として4年間学び続けることができるようにする。

このように、令和7年度からの新カリキュラムにおいて、低下傾向の各項目への対応を行うことで、更なる学修成果の向上を目指す。

外国語学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業」「教員への質問・意見を述べた経験」は学部全体で最も高い比率を示しており、「学生同士が議論する授業」も平均を大きく上回っている。外国語学部では主体的・積極的に参加する授業が行われていることが読み取れる。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
自分の考えや課題を発表する授業有無	87.7	95.2	96.1
教員への質問・意見を述べた経験有無	71.2	79.8	81.9
学生同士が議論する授業有無	79.5	79.8	79.9
演習・実習・フィールドワークなど体験授業有無	28.3	56.0	59.1
定期的な小テスト・レポートのある授業有無	98.6	94.0	95.7
Bb、E-mail等で教材・課題の受け取りや提出を行う授業有無	98.2	98.2	98.8

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「教職員への学修に関する相談経験」がある率は年々上昇し、令和5年度は平均を大きく上回っている。一方で、「図書館で資料・文献を調べた経験」は平均より大幅に低い。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	63.0	81.5	81.9
教職員への学修に関する相談経験	31.5	45.2	51.2
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	21.9	47.6	45.3
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	96.3	95.2	94.5

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
授業出席科目数	13科目以上34.2%	13科目以上33.3%	13科目以上29.9%
授業時間外の授業関連学修・経験時間	1~3時間36.5%	1~3時間38.1%	1~3時間42.1%
授業と関連しない読書時間	1~3時間38.4%	1~3時間43.5%	全くない38.2%
部活動・サークル活動参加時間	全くない87.7%	全くない66.7%	全くない63.0%
アルバイト・就労時間	19時間以上33.8%	19時間以上45.8%	19時間以上48.4%
個人的な趣味活動時間	19時間以上27.4%	19時間以上37.5%	19時間以上43.7%

※各項目設問において最も選択された選択肢の比率(単位: %)

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

ほとんどの項目が9割を超えている。「リーダーシップ」は唯一8割台であるものの、リーダーシップが「身に付いた」割合は年々増加している。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
一般的な教養	95.4	95.8	99.2
専門分野に関する知識・技能	96.3	98.2	98.4
情報収集力	97.7	98.8	98.8
課題発見・解決能力	95.0	96.4	98.8
協働力	89.5	94.6	93.7
リーダーシップ	77.2	82.1	85.8
社会が直面する課題の理解	88.6	88.7	92.5
外国語運用能力	93.6	96.4	96.1
発表能力	92.2	94.0	98.8
文章表現能力	94.1	95.2	98.0
パソコンで資料を作成する力	96.8	97.6	98.0

※「身に付いた計(よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた)」の比率(単位:%)

(2) 長所と課題

「外国語運用能力」「専門分野に関する知識・技能」「協働力」「発表能力」を「よく身に付いた」と回答した割合が、外国語学部は学部別で最も高かった。これは外国語学部の長所といえる。一方、「図書館で資料・文献を調べた経験」の割合は、学部別で最も低く、「授業と関連しない読書時間」は「全くない」が最も多くなり、4割近くに及んでいる。図書館の利用率を高め、本に触れる機会を増やすことが大きな課題だと思われる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

図書館には、本をはじめとした多様な学習資源が揃っており、それらに接する機会を増やす必要がある。そのためには、課題を課す際に、インターネットで入手可能な資料だけでなく、図書資料も使用するよう促したり、図書館のアクティブ・ラーニングエリアを積極的に活用させたりするなどの方法が考えられる。

5. 学部・研究科設問項目について

(1) 海外での語学研修経験の有無

大学主催の海外語学研修への参加者の割合が令和4年度よりも増加したものの、依然として経験のない学生の割合が圧倒的に多い状況が続いている。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
ない	74.0	85.1	83.1
ある(大学主催)	16.0	6.0	10.6
ある(個人)	10.0	9.5	7.1

(2) 語学検定試験受験の有無

英検の受験率は年々減少し、TOEICが増加傾向にある。令和5年度は未受験者も増加した。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度
英検	61.6	59.5	53.5
TOEIC	57.5	63.1	65.0
中国語検定	13.2	16.1	11.8
ない	14.2	6.0	7.9

1. 本年度の授業の中での経験について

「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」のあった計の数値が高く(学部全体60.1%:工学部90.6%)、工学部の特徴となっている。また「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」も高い結果となった(学部全体66.8%:工学部75.1%)。一方で、「自分の考えや課題を発表する授業有無」(学部全体84.3%:工学部83.9%)と「学生同士が議論する授業有無」(学部全体74.0%:工学部73.5%)は、前回からそれぞれ6.1%増、6.3%増と向上したことで、学部全体の数値に近づいている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験有無」のあった計の数値は全体と比較して低い(学部全体51.7%:工学部41.9%)。それに対し、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」(学部全体80.5%:工学部83.6%)は前回から8.5%増、「教職員への学修に関する相談経験有無」(学部全体41.5%:工学部50.2%)は4.7%増となり、学部全体の数値を上回ってきている。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は、3時間以下である学生が39.4%(前回44.1%)と学部全体と比べて低く、全学部の中でも最少であった。一方、19時間以上取り組んでいる学生は学部で最多で15.7%(前回13.3%)であった。「週当たりの授業と関連しない読書時間」は、ゼロの学生が32.0%(前回29.0%)であった。「週当たりの部活・サークル活動参加時間」「週当たりのアルバイト・就労時間」はゼロがそれぞれ66.8%(前回72.6%)、19.8%(前回29.8%)であり、他学部と比較して少ないものの、前回と比べてその割合は減少している。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「一般的な教養」「専門分野に関する知識・技能」「情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「他の人と協力して物事を進めていく力」の身に付いた計の数値は、それぞれ97.7%、99.3%、99.1%、97.7%、94.9%と、いずれも高い値を示している。「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」(学部全体85.6%:工学部84.3%)は前回から4.1%増で、学部全体とほぼ同じ値となった。一方で、「外国語の運用能力」(学部全体83.7%:工学部74.2%)、「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する能力」(学部全体92.9%:工学部85.0%)は全学部の中で最も低い値となっている。

(2)長所と課題

長所は、「専門分野に関する知識・技能」の身に付いた計が99.3%で、特にその中で「よく身に付いた」「身に付いた」という回答の合計で80.9%と、学部全体や他の学部と比べても高い数値になった点である。課題は、身に付いた計の数値が全体の-5%以下となった「外国語の運用能力」と「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する能力」である。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

ディプロマ・ポリシーにおける「専門的な知識と技術」「課題解決能力」「他者との協働」の項目については、これまで同様に身に付いたと感じている学生が多く、それに加えて今回は「リーダーシップ能力」の項目についても身に付いたと感じる学生が増えている。一方で「外国語運用能力」「社会的課題を理解する力」は不足していると感じている学生が多い。「外国語運用能力」の改善方策としては、語学科目への積極的な参加や、語学に関する資格取得や留学への参加を学生に促すことが挙げられる。また「社会的課題を理解する力」については、学部専門科目におけるプロジェクト型授業での課題設定の工夫等による改善方策に加えて、教養教育科目カリキュラム改定による効果にも期待する。

5. 学部・研究科設問項目について

工学部設問項目の「リーダーシップ能力や課題に対する解決能力」では、1年生から4年生まで年次が進むにつれ「よく身に付いた」「身に付いた」の合計が43.6%、55.8%、63.8%、65.9%と増加しており、特に「よく身に付いた」は3年生が24.8%と最も高く、実験・実習、演習が進むにつれて高い達成感が得られていることが分かる。また、「コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会の有無」は、あった計が2年生と3年生、4年生でそれぞれ24.4%、26.7%、38.9%となっており、学年が進むにつれて交流が進む様子がうかがえる。その一方で「なかった」という回答も多く、他学科の教員や学生と話す機会を増やし学科間の交流を促すことが今後の課題である。

1. 本年度の授業の中での経験について

各表の↗は前回より上昇を、↘は下降を、→は変動1%以下の横ばいを示し、また大学全体の数字と比較して5%以上の差がある場合は朱書／青書した(以下同じ)。「自分の考えや課題を発表する授業」「学生同士が議論する授業」は、引き続き大学全体より10%前後多い数字を示しているが、「教員への質問・意見を述べたことの経験」は低下した。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度	大学全体
自分の考えや課題を発表する授業	↗ 88.7	↗ 93.3	↗ 94.4	84.8
教員への質問・意見を述べたことの経験	↘ 63.9	↗ 74.0	↘ 68.4	67.8
学生同士が議論する授業	↗ 79.1	↗ 84.8	→ 85.1	74.0
演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	↘ 35.8	↗ 60.1	→ 61.0	58.5
定期的な小テスト・レポートのある授業	↗ 97.0	↘ 94.7	→ 94.0	95.3
Blackboard、E-mail等を活用し、教材・課題の受け取りや提出を行った授業	↗ 98.5	→ 97.9	→ 98.6	97.6

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

前回と比べ各項目とも低下しているが、概ね大学全体の数字と同水準にある。ただし「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」が10%程度低下しているのが目立つ。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度	大学全体
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	↘ 58.8	↗ 80.6	↘ 78.2	80.3
教職員への学修に関する相談経験	↘ 32.5	↗ 45.9	↘ 44.2	42.6
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	↘ 33.4	↗ 60.8	↘ 50.7	52.8
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	↘ 92.5	↗ 95.8	↘ 94.5	94.8

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

授業出席科目数「13科目以上」「部活動・サークル活動参加時間(1時間以上の合計)」が引き続き全学で最も高い。他方、「読書時間(1時間以上の合計)」は大幅に低下している。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度	大学全体
授業出席科目数	13科目以上(51.9)	13科目以上(35.0)	13科目以上(39.1)	13科目以上(32.7)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(46.6)	1～3時間(44.5)	1～3時間(43.3)	1～3時間(42.1)
授業と関連しない読書時間>1	↘ 71.6	↗ 77.0	↘ 60.9	64.7
部活動・サークル活動参加時間>1	↘ 31.0	↗ 45.6	↗ 57.7	39.0
アルバイト・就労時間>1	↘ 70.1	↗ 80.9	↘ 74.4	83.0
個人的な趣味活動時間	1～3時間(25.4)	19時間以上(27.6)	19時間以上(37.2)	19時間以上(39.7)

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

「リーダーシップ」「社会が直面する課題の理解」「外国語運用能力」は、引き続き大学全体と比較しても高い数字を示している。ただし「外国語運用能力」「発表能力」「文章表現能力」「パソコンで資料を作成する力」は前回より低下傾向にある。

設問項目	令和2年度	令和4年度	令和5年度	大学全体
一般的な教養	↘ 63.3	↗ 78.5	↗ 80.0	78.5
専門分野に関する知識・技能	↘ 51.6	↗ 70.7	↗ 73.0	75.9
情報収集力	↘ 61.8	↗ 75.3	→ 74.4	78.5
課題発見・解決能力	↘ 56.4	↗ 71.0	↗ 73.5	74.1
協働力	↘ 54.9	↗ 72.1	↗ 75.4	73.6
リーダーシップ	↘ 41.5	↗ 57.2	↗ 59.5	51.8
社会が直面する課題の理解	↘ 62.4	↗ 69.6	↗ 74.9	61.4
外国語運用能力	↘ 42.6	↗ 51.2	↘ 44.2	39.0
発表能力	↘ 53.4	↗ 66.5	↘ 64.7	61.7
文章表現能力	↘ 54.9	↗ 66.8	↘ 64.7	66.2
パソコンで資料を作成する力	↗ 76.7	↗ 79.5	↘ 78.2	78.0

※「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた)」の比率(単位:%) (「少し身に付いた」を除く)

(2) 長所と課題

長所としては、リーダーシップを有し、社会が直面する課題を理解し、外国語を含めプレゼン力を身に付ける教育があげられる。上記1の「自分の考えや課題を発表する授業」「学生同士が議論する授業」の展開、及び上記3の課外活動への積極的参加等が反映していることが考えられる。

他方、課題としては、「外国語運用能力」「発表能力」「文章表現能力」「パソコンで資料を作成する力」が前回より低下傾向にある。この原因として下記5で示すように、海外研修経験や海外ボランティア経験の不足が十分回復していないこと等が考えられるが、日常の授業等においても、適切な改善策を検討する必要がある。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記(2)への対応として、今後も積極的に多くの海外研修やボランティアの機会を設け、学生の参加を促進していく必要がある。また2及び3で明らかになったように、図書館の活用経験や読書時間が顕著に低下していることから、対策を講じる必要がある。

5. 学部・研究科設問項目について

コロナの影響により海外研修経験が大幅に低下し、未だ回復していないことが明らかである。ボランティア経験も、一旦上昇したが再度低下し、コロナ時の水準に戻っている。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度	令和5年度
海外研修経験	44.0	—	↘ 19.4	→ 19.5
ボランティア・NGO活動経験	38.0	↘ 22.4	↗ 26.1	↘ 20.9

※海外研修経験は「ある計(4週間以内+5週間～3カ月+4カ月以上)」の比率(単位:%)

経済学研究科- 1

1. 本年度の授業の中での経験について

令和5年度においては、令和元年度、令和2年度、令和4年度（以下、「過去3年間」という。）の結果と比較すると、令和元年度から令和2年度にかけて減少となった項目の全てにおいて上昇が見られる。特に「学生同士が議論する授業」「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」での上昇は顕著である。

設問項目	「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）			
	令和元年度	令和2年度	令和4年度	令和5年度
自分の考えや課題を発表する授業	100.0	94.1	95.4	100.0
教員への質問・意見を述べたことの経験	100.0	88.2	90.9	100.0
学生同士が議論する授業	69.2	53.0	100.0	100.0
演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業	76.9	70.6	90.9	100.0
定期的な小テスト・レポートのある授業	92.3	88.3	86.3	100.0
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	100.0	94.1	90.9	100.0

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去3年間の結果と比較すると、令和元年度から令和2年度にかけて減少となった項目の全てにおいて、コロナ禍前の令和元年度における数値を回復するかそれ以上の上昇となっている。

設問項目	「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）			
	令和元年度	令和2年度	令和4年度	令和5年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	84.6	76.5	90.9	100.0
教職員への学修に関する相談経験	100.0	82.4	90.9	100.0
授業や課題のための図書館で資料・文献を調べた経験	76.9	58.8	95.5	100.0
授業や課題のためのインターネットでの情報収集経験	92.3	100.0	100.0	100.0

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去3年間の結果と比較すると、授業出席科目数が回復したこと、授業時間以外での学修時間が収束していること、読書時間が増加していること、アルバイト時間が減少傾向にあること、などの変化が見られる。これらは、コロナ禍が終わって時間が経つごとに、学生が生活時間と学修等の時間をどのように配分するかが変化していることを反映しているものと思われる。

経済学研究科- 2

設問項目	各設問項目において最も選択された選択肢の比率			
	令和元年度	令和2年度	令和4年度	令和5年度
授業出席科目数	7～8科目(38.5%)	7～8科目(41.2%)	1～2科目(40.9%)	7～8科目(100.0%)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(23.1%) 19時間以上 同率タイ	4～6時間 10～12時間(27.2%) 19時間以上 同率タイ	7～9時間(27.3%)	7～9時間(100.0%)
授業と関連しない読書時間	1～3時間(30.8%)	1～3時間(35.3%)	4～6時間(27.3%)	4～6時間(100.0%)
アルバイト・就労時間	「全くない」を除けば16～18時間(23.1%)	「全くない」を除けば4～6時間 10～12時間(11.8%) 13～15時間 同率タイ	「全くない」を除けば1～3時間(18.2%)	「全くない」を除けば10～12時間(100.0%)
個人的な趣味活動時間	1～3時間(46.2%)	10～12時間(29.4%)	7～9時間(31.8%)	4～6時間(100.0%)

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

過去3年間の結果と比較すると、令和元年度から令和2年度にかけて減少となったものの全ての項目において上昇となった。特に令和2年度との比較では「協働力」「リーダーシップ」「外国語運用能力」の上昇が顕著である。

設問項目	「身についた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(単位: %)			
	令和元年度	令和2年度	令和4年度	令和5年度
専門分野に関する知識・技能	100.0	100.0	100.0	100.0
情報収集力	100.0	100.0	100.0	100.0
課題発見・解決能力	100.0	100.0	100.0	100.0
協働力	92.3	94.1	100.0	100.0
リーダーシップ	84.6	82.4	86.4	100.0
社会が直面する課題の理解	100.0	100.0	95.5	100.0
外国語運用能力	100.0	82.4	100.0	100.0
発表能力	100.0	100.0	100.0	100.0
文章表現能力	100.0	100.0	100.0	100.0
パソコンで資料を作成する力	100.0	100.0	100.0	100.0

(2)長所と課題

コロナ禍となった令和2年度においては、リモート授業を中心とした学修成果の達成状況が全体的に減少傾向となった。しかし、対面授業が復活した令和4年度では、全ての項目で、コロナ禍前の令和元年度の水準を回復するか上回る結果となった。令和5年度においても全ての項目で良い状態である。

過去3年間の結果と比較して、アルバイト時間が変動していることについては、学修行動の変容に関連するのか、学生の経済状況の変容に関連するのか、他の資料を参照しつつ判断することが求められる。

なお、今回の調査では、過去3年間で異なり、経済学研究科で回答を寄せた大学院生は1名のみであった。これにより、調査結果に偏りが生じていることも考えられるため、傾向の分析には留意を要する。今後は、多くの大学院生からの回答が得られるよう、調査への協力を呼びかけたい。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、大きな課題はみられない。既に「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行う授業」の形態は定着していると思われる。現在は各種の資料が電子媒体で入手可能ではあるものの、情報収集において図書館の存在意義は少しも失われていない。今後とも、図書館をさらに積極的に活用することを学生に奨励したい。

1. 本年度の授業の中での経験について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q6)自分の考えや課題を発表する授業」(R4:94.7%、R2:100%)、「(Q7)教員への質問・意見を述べたこととの経験」(R4:100%、R2:100%)、「(Q8)学生同士が議論する授業」(R4:84.2%、R2:85.7%)、「(Q9)演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」(R4:78.9%、R2:71.4%)、「(Q10)定期的な小テスト・レポートのある授業」(R4:89.5%、R2:85.8%)、「(Q11) Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業」(R4:94.7%、R2:100%)であった。

この結果から、令和2年度と令和4年度との比較において、学修環境は大きく変わっていないことがわかる。一部項目において若干の変動があるものの、いずれも誤差の範囲内に収まっている。教育環境や学修方法の微調整が行われた結果と考えられる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q12)他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(R4:63.2%、R2:57.1%)、「(Q13)教職員への学修に関する相談経験」(R4:79.0%、R2:71.4%)、「(Q14)授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」(R4:89.5%、R2:64.3%)、「(Q15)授業や課題のためインターネットでの情報収集」(R4:100%、R2:100%)であった。

この結果から、学生同士の学修コミュニティが活発化していることや学生が教職員との相談を積極的に行き、学修に関する支援を受ける機会が増えていることがわかる。また、図書館を活用した学修や研究活動の機会が増え、インターネットが重要な情報収集源になっていることがうかがえる。

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

アンケート結果において、授業時間以外の学修時間が過当たり1～3時間(R4:21.1%、R2:7.1%)、4～6時間(R4:10.5%、R2:42.9%)、7～9時間(R4:15.8%、R2:7.1%)、10～12時間(R4:10.5%、R2:14.3%)、13～15時間(R4:5.3%、R2:0%)、16～18時間(R4:5.3%、R2:0%)、19時間以上(R4:31.6%、R2:28.6%)であった。

この結果から、授業時間以外にも多くの時間を学修に費やす学生がいる一方で、少ない学修時間で済ませる学生も存在していることがわかる。令和4年度と令和2年度の比較では、令和2年度は過当たりの学修時間が6時間未満の学生が50%を占めていたが、令和4年度では31.6%に減っている傾向から考えると、学修意欲が高く、学修・研究に時間をかけて取り組む大学院生が増えたものと考えられる。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

アンケート結果において、「よく身に付いた」「身に付いた」を集計すると、「(Q23)専門分野に関する知識・技能」(R4:89.5%、R2:78.6%)、「(Q24)情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」(R4:84.2%、R2:100%)、「(Q25)物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」(R4:73.7%、R2:85.8%)、「(Q26)他の人と協力して物事を進めていく力」(R4:63.1%、R2:71.5%)、「(Q27)必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」(R4:52.7%、R2:78.6%)、「(Q28)社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」(R4:47.4%、R2:71.5%)、「(Q29)外国語の運用能力」(R4:57.9%、R2:57.2%)、「(Q30)学修した内容をまとめて、それを発表する力」(R4:84.2%、R2:85.7%)、「(Q31)表現すべき内容を文章にして書ける力」(R4:68.4%、R2:78.6%)、「(Q32)パソコンで文書や資料を作成する力」(R4:73.7%、R2:100%)であった。

この結果から、令和4年度の学生は専門分野における知識や技能の修得においては高い水準を維持しているが、情報収集能力や外国語能力、社会的な課題への理解に関しては改善の余地があることを示している。他方で、コミュニケーション能力や情報処理能力に関しては高い水準が維持されており、学生の多様な能力の育成が重要である。

(2) 長所と課題

長所としては、自主的な学修意欲の向上と積極的な学修行動が際立っており、専門分野に関する知識や技能の修得において高い成果が見られる。一方で、情報収集能力や外国語の運用能力、社会的な課題への理解に改善の余地があり、学生の一部には学修時間の不足も見られる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

学生の情報収集能力を向上させるために、情報リテラシー教育を充実させることが重要かもしれない。図書館やデータベースの活用方法、文献の選定と批判的な読解力の育成などを取り入れた授業、あるいは講習会の開催がこれを補うものとして考えられる。

また、商学研究科では、以前より、研究進捗の確認、学生間の交流と学修機会の提供、研究成果の可視化、学生の自己成長の促進を目的として、7月と10月に修士論文中間報告会を開催している。こうした取り組みをさらに活性化させていきたい。

工学研究科-1

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」は令和2年度の100%からは若干下がっているものの、どちらも95.2%と令和4年度と同様の高い値となっている。しかし「学生同士が議論する授業有無」については令和4年度の96.7%から76.2%へと大きく低下した。一方で、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」は令和2年度の70%から10%ずつ増加し、令和5年度は90.5%であった。教員の授業への工夫は続いているものの、コロナ禍の影響もあって学生間のつながりが希薄になり、議論に発展しにくいことが「学生同士が議論する授業有無」のみ大きく低下した原因ではないかと考えられる。「定期的な小テスト・レポートのある授業有無」は昨年度に低下して83.3%となったが、令和5年度は90.5%と持ち直した。「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無」は令和2年度の100%から7%前後ずつ減少し、令和5年度は85.4%であった。これは、対面式が当たり前になり、直接やメールボックスを用いたやり取りが多くなっているためと思われる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」は令和2年度に70%に大きく減少した後、少しずつ上昇し本年度は76.2%となった。友人と話さない、あるいは友人を作れない状況が続いてはいるものの、少しずつ改善しているようにも見られるので、今後に期待したい。逆に「教職員への学修に関する相談経験有無」は友人との相談が気軽になくなった令和2年度に80%に増加したが、令和4年度、令和5年度はそれぞれ、73.3%、76.2%と若干低下気味である。「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」は令和2年度の80%から減少傾向であり令和5年度は52.4%と非常に低くなった。反対に「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」については増加傾向が続き令和5年度は100%となっており、情報源が図書館から、より気軽に検索できるインターネットに変わってきているように思われる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業出席科目数」は3～4科目が多く、33.3%であった。令和4年度は13科目以上の学生が最も多く、異常に感じられたが、令和5年度はほぼ例年並みであった。やはり授業形態の変更などにより、令和4年度のみ科目数が異常になったと思われる。

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」については4～6時間が最も多く33.3%であり、次に多いのは19時間以上の28.6%であった。数値は若干異なるものの、傾向は令和4年度と同様であり、学修時間の多い学生と少な目の学生の差が激しい状態が続いている。「週当たりの授業と関連しない読書時間」は1～3時間が最も多く、38.1%となった。読書時間は短い学生が多く、かつ増加している傾向が続いている。「週当たりのアルバイト・就労時間」は令和4年度、全くないと19時間以上がどちらも26.7%と多く、令和2年度と同様、経済的支援が必要な学生数は多くいると思われる状況であったが、令和5年度は全くないが42.9%と急激に増加し、19時間以上は14.3%と半減した。外国人留学生が増えたこともあるが、経済的に余裕のある学生が増加したものと思われる。「週当たりの個人的な趣味活動時間」については令和4年度に1～3時間と19時間以上がどちらも30%と、二極化したが、令和5年度は4～6時間が38.1%と長時間趣味に費やす学生は減少した。しかし、全体としてみると、従来同様、趣味に多くの時間を使う学生が増加している傾向にある。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「専門分野に関する知識・技能」は身に付いた計が100%となり高い水準を維持できている。「他の人と協力して物事を進めていく力」「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」は令和2年度に80%まで低下したが、令和5年度はどちらも95.2%となっており、学生活動が元に戻ったと考えてよいように思われる。その他のほとんどの項目についても全体的に95%以上の高い水準であったが、「社会が直面する課題を理解する力」「外国語の運用能力」については81%と低下傾向である。

(2)長所と課題

「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「情報収集能力」「プレゼンテーション能力」「パソコン活用能力」などを身につけたと考える学生は95%を超えており、ほとんどの学生が大学院生として必要な力を身につけられているようである。一方で、「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」「外国語の運用能力」が身に付いたと考える学生は81%に低下している。これは大学院の外を見る機会が増えていないためと考えられる。理系であることを考慮すれば、これらの点については難しいとも考えられるが、改善していく必要はあると思われる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

教育内容・方法などの改善は進んでおり、ほとんどの学生が大学院生活に満足していると思われるものの、趣味などの時間を見ると大学にいる時間はあまり増えていないように思われる。学生が学内にいる時間を増やし、研究活動を基本に学習活動を活発化させる必要があると思われる。例えば、授業やゼミを通じて、学生の興味ある分野と研究とを結びつけるなど、研究に入りやすくする工夫を行っていく必要があると考えられる。なお、機械システム工学コースでは、今年度の入学者より研究室ごとの配属人数を緩和し、学生の望む研究や学習ができるように改善している。

言語教育研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表」「教員への質問・意見」については、前年度と同様に「あった」が100.0%であった。一方、「学生同士が議論する授業」については、「あった計」が73.3%とやや低く、前年度との比較では1.7%減少した。「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」は「あった計」が66.7%で、前年度の79.2%よりも低くなった。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生との授業内容に関する話し合い」は73.3%で、前年度に比べ5.9%減であり、学生間の意見の交流に関してはやや少ない。「教職員への相談」は73.3%(前年度比14.2%減)とやや低めであるが、「授業のための図書館での資料等調査」は93.3%(前年度比2.5%減)、「インターネットでの情報収集」を経験した学生の割合は93.3%(前年度比1.6%増)であり、例年通り利用率は高い。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業出席科目数」は「1～2科目」が53.3%と最も多い。前年度は「3～4科目」が29.2%、次いで「7～8科目」が25.0%であった。これは回答者の学年による差が現れたと考えられる。「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は「4～6時間」が33.3%で、前年度と比較し増加している。「授業と関連しない読書時間」は「全くない」という回答者から「19時間以上」という回答者まで個人差が大きく、これは例年通りである。一方、「アルバイト時間」は「全くない」が6.7%(前年度比10.0%減)、「19時間以上」が40.0%(前年度比10.7%増)で、全体的に増加している。「個人的な趣味活動時間」は、ほぼ前年度並みである。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

ほとんどの項目は前年度並みである。「専門分野に関する知識・技能」「必要な情報を得る力」「課題を発見し、解決の方向を考える力」「学修した内容をまとめ、発表する力」「パソコンで文書を作成する力」が「身に付いた」はいずれも100%であった。しかし、「他の人と協力して進める力」が「身に付いた」は86.7%(前年度比0.8%減)、「リーダーシップ能力」が「身に付いた」は80.0%(前年度比7.5%減)とやや低く、十分とは言えない結果であった。

(2) 長所と課題

「専門分野に関する知識・技能」から「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」まで全体的に平均的な結果となっている。本研究科は、外国語の修得に限定されずにバランスの良い教育が行われているのが長所と言える。一方で、「他の人と協力して物事を進めていく力」及び「リーダーシップ能力」の評価がやや低いのが今後の課題として考えられる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記の点から判断して以下の2点が今後の改善策として考えられる。①人数が少ないゼミ形式の授業が多いと思われるが、ゼミの中だけでなく学年や専門を超えた学生同士の勉強会等の中での交流が求められる。発表会前の合同練習会や博士後期課程の学生を中心とした勉強会などの取り組みを始めてはいるものの、まだ十分な成果が上がっていない。②リーダーシップ能力に関しては、それらの活動の中で養われるものと思われる。学生主体の活動機会を増やしていくことが効果的だと考えられるため、引き続き支援を行っていききたい。

国際協力学研究科-1

1. 本年度の授業の中での経験について

本年度の調査結果をみる限り、学生が主体的に学修する環境が概ね確保されていたことが確認できる。質問項目別の結果を順にみると、まず「自分の考えや課題を発表する授業有無」については、最近3回の調査で「あった」の値が100%を維持している。「教員への質問・意見を述べたことの経験の有無」についても「あった」割合が95%を維持している。「学生同士が議論する授業有無」については、「あった」の回答が80%台を維持しているが、コロナ禍の令和2年度の調査結果に近い水準まで低下していることから、改善策を講じる必要がある。「体験授業の有無」の項目は前2回の調査では「あった」の回答は50%台であったが、今回は60%を上回った。今後も、「なかった」の回答比率を下げるような工夫を継続していくことにする。「小テストやレポートのある授業有無」については、前2回の調査では90%であったが、今回の調査では85%と若干低下しており、今後の動向を注視していくことにする。BlackboardやE-mailを活用した教材・課題の受取りや提出については、「あった」の回答が引き続き90%台を維持しているが、若干の低下傾向が観察される。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

授業外の学修態度についても、令和5年度のアンケート結果をみる限り、授業時間外においても良好な学修姿勢を示していることが確認された。項目別にみると、「学生同士の授業内容の話し合いや一緒に勉強する経験の有無」については、「あった」の回答割合が令和4年度の78%から低下し、令和5年度は68%となり、令和2年度調査と同水準になっている。「教職員への学修相談経験の有無」については、「ある」の回答者の割合が、令和2年度の68%から改善して令和5年度は74%となった。また、「まったくなかった」の回答がゼロになったことも改善の1つの指標と理解できる。「図書館を利用する機会」については、「ある」の回答比率は、令和2年度68%から、令和4年度96%、令和5年度100%という結果となった。「インターネットでの情報収集経験の有無」では、これまで「あった」の回答者は100%に近い割合で推移してきたが、令和5年度は90%にまで低下していることから、この点についても今後の動向を注視したい。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

令和5年度の調査結果によると、週当たりの授業出席科目数を除くと、学生は学修、アルバイト、趣味などにバランスよく時間を割いている姿が浮かび上がってくる。項目別にみると、まず「週当たりの授業出席科目数」では、「13科目以上」と回答した比率が令和2年度の30%から令和5年度には21%まで低下している。一方で「1～2科目」の比率は上昇傾向にあり、令和5年度では42%となっている。1年次に多くの科目を履修し、2年次には修士論文作成に専念する傾向はあるものの、2年間でのバランスの取れた履修計画をたてる学生もがあらわれているといえよう。「週当たりの授業時間外の学修・経験時間」の回答結果をみると、「19時間以上」の割合は令和2年度32%から、令和4年度11%、そして令和5年度37%へと推移している。同時に、「4～6時間」の回答割合も、最近の3回の調査において30%前後で推移している。全体的には、令和4年度こそ時間が短くなったが、令和5年度は令和2年度のレベルに回復しており、授業外の学修時間が確保されている。「授業と関連しない読書時間」では、週当たり「19時間以上」と回答した学生の割合は20%前後で推移しているが、「全くない」の回答割合が、12%、2.2%、16%と推移しており、注視していく必要がある。「週当たりアルバイト・就労時間」は、「19時間以上」と回答した学生比率は8%、13%、26%と、3回の調査において増加傾向にある。一方、「全くしていない」の割合は37%、36%、26%と低下している。「1～6時間」が引き続きボリュームゾーンであるが、この割合が低下していることから、アルバイト時間が増える傾向にある。「週当たりの趣味活動時間」では3回の調査結果において「1～3時間」と回答した割合が最も多く、44%、33%、26%と推移している。回答者の4～5割は1週間当たり1～6時間ほど趣味活動に時間を費やしている。直近では週当たり19時間以上を趣味活動に費やす割合が26%に達しており、これまでにない結果である。この点について今後の動向を注視していきたい。

国際協力学研究科- 2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

学修成果に関する各回答項目で概ね良好な結果が維持されていることが確認できた。ただし「他の人と協力して物事を進めていく力」「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」及び「外国語の運用能力」の3つの設問においては、全体の1～2割程度の学生が「ほとんど身に付かない」と回答している。この点については、3回の調査結果に共通する結果であるだけに、対応策を講じていく必要がある。

(2)長所と課題

国際社会における喫緊の課題を研究テーマとする学生が多いため、情報収集・分析能力、課題発見及び課題解決能力などの各種能力が講義・演習や研究活動を通して高いレベルで維持されている。今後の課題としては、学修での協力関係やリーダーシップ能力の育成、外国語の運用能力の向上が指摘できる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

「他の人との協力」や「リーダーシップの発揮」に加え、「学生同士の授業内容の話し合いや一緒に勉強する経験の有無」においても低い結果がでている。この結果から、学生の「個人主義化」が進んでいる可能性もある。グループ・協働作業の機会を増やし、リーダーシップを発揮する機会を創造するような授業運営を行う必要がある。また、講義や演習などで日本語や英語の運用能力を高める工夫を検討する必要がある。

5. 学部・研究科設問項目について

研究科独自の設問項目は設定していないが、問題点の共有や改善の方策についての教員間での意見交換は研究科委員会などを通して日常的に行われている。実態把握が必要であると判断された場合には、研究科設問項目に速やかに反映させることにする。

地方政治行政研究科- 1

1. 本年度の授業の中での経験について

○調査時点の本研究科在籍者13名の内3名が回答した。内訳は、修士課程1年1名、同2年2名であり、全員外国人留学生である。

○授業内活動の結果については、以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。

・「自分の考えや課題の発表経験、教員への質問・意見の経験」:100%

・「学生同士の議論経験、演習・実験・実習・フィールドワークなどの体験」「定期的小テスト・レポート経験」「Blackboard・E-mail等の活用による課題等の受領や提出経験」:66.7%

以上のことから、総じて、授業内活動が活発に行われたことが分かる。前年度(回答数13名)と比べ回答数が少ないため、1名(33.3%)の回答の影響が強く出ていることから、過年度と実質的な違いはないと考える。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。

・「図書館で資料文献を調べた経験、インターネットでの情報収集経験」100%

・「他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験」「教職員への学修に関する相談経験」66.7%

以上のことから、総じて、授業時間外の活動が活発に行われたことが分かる。前年度と比べ回答数が少ないため、1名の回答の影響が強く出ることから、過年度と実質的な違いはないと考える。

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

・「過当たりの授業出席科目数」:1-2科目、3-4科目、7-8科目を各1名ずつ選択している。大学院生全体の傾向と類似している。

・「過当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」:19時間以上が2名、1-3時間が1名。6時間以下を選択した学生の割合が半数を超えた昨年度と比べ、回答数が少ないとはいえ、長時間の傾向がみられる。

・過当たりの授業と関連しない読書時間:19時間以上が2名、1-3時間が1名。6時間以下を選択した学生の割合が半数を超えた昨年度と比べ、回答数が少ないとはいえ、長時間の傾向がみられる。

・「過当たりのアルバイト・就労時間」:「全くない」2名、「19時間以上」が1名。昨年度と同様、二極化している。

・「過当たりの個人的な趣味活動時間」:7-9時間1名、10-12時間1名、19時間以上1名。6時間以下を選択した学生の割合が半数を超える昨年度と比べ、回答数が少ないとはいえ、長時間の傾向がみられる。

以上のことから、昨年度とは異なり、授業時間よりも、授業以外での学修、読書、個人的な趣味活動時間が増加した傾向がみられる。回答者3名のうち2名が修士課程2年生であることの影響も考えられる。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」の数値結果である。

・「専門分野に関する知識・技能」「情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「他の人と協力して物事を進めていく力」「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」「学修した内容をまとめて、それを発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」「パソコンで文書や資料を作成する力」:100%

・「外国語の運用能力」: 66.7%

・「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」:33.3%(少し身に付いた)

以上のことから、総じて、学修によって身に付けることが期待される力は向上したことが分かる。一方、リーダーシップ発揮の力に関する数値の低さ(33.3%)については、令和2年度50%(回答数4)、令和4年度84.6%(回答数13)となっており、授業等で関わる学生数と関係している可能性がある。

(2)長所と課題

上記10項目のうち8項目において、身に付いた(「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」)が100%となっており、令和2年度(7項目)、令和4年(10項目)に続き良い傾向にある。また、リーダーシップ(33.3%)及び外国語運用能力(66.7%)に係る項目については、令和2年度(50.0%、25.0%)、令和4年度(84.7%、77.0%)となっている。特にリーダーシップ発揮の力については次年度以降も数値を注視していくことが望ましい。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記に示された良好な状態を今後も持続できるよう、現在の取り組みの継続が求められている。また、リーダーシップ発揮の力を涵養するために授業内での学生同士の議論を促していく必要がある。